【論文】

幕末期に上海を訪れた日本人青年藩士たちの行動空間
―名倉予何人、中牟田倉之助、高杉晋作―

愛知大学東亜同文書院大学記念センター・フェロー
愛知大学名誉教授　藤田 佳久

1. はじめに

本稿は幕末期に幕府によって上海へ「千歳丸」で派遣された日本人 51 人、外国人 16 人、計 67 人のうち、幕府の役人の従者として各藩から選ばれた 8 人の青年武士たちが、上海でどのように行動し、上海をどのように認識したかについて、彼らが記録した日記を手掛かりにして明らかにしようとする作業の一環である。

日本人 51 人のうち約半数は水夫や賄い方たちであり、残る半数が江戸および長崎の役人と江戸役人に従う形の 20 代を中心にした 8 人の従者、および長崎の商人や通訳、記録掛などである。まさに長年の幕府による鎖国的状況を、幕府自らが打ち破る初めての実験的な海外派遣船であった。その狙いは清国との貿易の打診であり、実際の貿易実験の試みにあった。長崎の商人の参加は貿易そのものの狙いを意図したものであり、また、役人たちはその実際を観察し、その可能性を探る意図があった。そして若い従者たちには、その目で海外、とりわけ欧米が進出し、しかもおりしも長毛賊（太平天国軍）が上海を取り巻いて攻める厳しい状況をその目で確認させ、日本の今後を思案させようとする狙いがあったものと思われる。実際、役人たちが上海道台やこの派遣船の世話をしてくれたオランダ、さらにはイギリス、フランス、ロシアなどとの交流を中心に進める中、従者の若者たちは上陸や帰国準備作業などを除けば、かなり自由な行動が許されていたように見える。

しかし、上海の衛生状況は劣悪で、とくに汚染された黄浦江の水を飲んだ一行は、半数がコレラや赤痢などで倒れ、上陸さえできなかったし、水夫のうち 2 人は到着後数日で亡くなり、その後もう 1 人も亡くなっている。滞在中に、塵芥だけでなく、動物さらには人の死体も捨てられ、人の糞尿までが捨てられるこの黄浦江の状況を知り、一行は驚いている。

前稿では、そのような若者の従者のうち納富久次郎（佐賀藩）と日比野輝寛（美濃国高須藩）の二人の日記を取り上げ、この二人の上海での行動と上海像の認識について検討した(1)。この派遣団の全体像についてはこの前稿で触れてあり、詳しくはそれを参照いただきたい。ところでこの二人とも腹痛と下痢に倒れ、とくに 18 歳と最年少の納富は町歩きの途中で倒れた後は、町へ出られず、ずっと室内で過ごさざるを得なかった。しかし、室内へ多くの来客を招き、筆談で上海情報を得、また新聞や中牟田からの必要な情報を得るなど、18 歳とは思えないほどの力量を発揮した。一方、日比野は体調を戻しながら、町のなかを歩き、多くの人に会い、事物を観察し、また日比野を慕う来訪者も多く、面接者は延べ 100 人を超えた。小藩の出身ながら、これまたすぐれた力量を発揮し、幕末期における各藩の若い武士たちがかなり有能に教育されていたことがうかがわれた。

本稿では、前稿で示した若い従者の健康状態から、(C)の「多少体調を崩したが、積極的に上海の町中を歩き回って観察し、筆談により人々と交流したメンバー」から 3 人（後述）を選び、その行動とそれを踏まえた上海についての認識を比較しつつ検討する。

2. 先行研究

幕府による初めての海外派遣船については、派遣員たちによる豊かな記録があり、それをベースに近代日中関係の原点として、欧米列強の上海進出、さらには清国植民地化と清国の対応、長毛賊との戦争状況、それに関係した上海への人口集中、上海の近代化の原点、租界と県城との都市構造の形成などの対象が研究可能になるという観点から注目されてきた。ただし日記は個別的に存在していたが、その存在が知られるようになり、それらを集大成して広く一般化した。『幕末明治中国見聞記録集成』(2)の刊行はそれらの研究を可能にし、より研究をしやすい環境をもたらした。本稿もその恩恵をうけている。

幕末のこの上海派遣の全体像について最初に本格的に言及したのは、佐藤三郎の「文久 2 年における幕府貿易船千歳丸の上海派遣」(3)であり、ついで春名徹の『1862 年、幕府千歳丸の上海派遣』(4)であった。それは幕府の鎖国以来 220 年余ののちの初めての海外派遣であり、その歴史的意義とそれがその後の日本人の清国理解への質的変化をもたらしたのではないかという仮説の元に、貿易事情、上海を通した清国事情、清国人の日本人観、中国対策観などの観点から考察を進め、少なくとも彼らが記録した日記類が写本として各地に広がり読まれたとする断片的裏付けを示している。が、この点はまだ今後の研究課題でもあろう。その後、松沢弘陽は幕末日本人の西洋派遣の際に立ち寄った上海について、訪問者の上海を通じての西洋文化への感触などに言及している(5)。そして宮永孝はこの千歳丸の第 1 次隊を中心にしながら、それに続く第 2 次、第 3 次、第 4 次の各隊も踏まえ、幕末期の上海派遣の全体について各人の日記記録をまとめながら詳細に紹介した(6)。ただし、タイトルに用いられた高杉晋作はその記録内容が十分ないのに、シンボリックに扱われている点で、ほかのすぐれた記録を残した藩士たちにとっては不本意な扱いであろう。

このような日本人の清末における日本人の上海訪問は、中国研究者にも関心を呼び、いくつかの論考が発表された。

まず馮天瑜は千歳丸の上海行きによる日本人の清国観察を、まずとくに高杉晋作と五代友厚に焦点をあて、2 人の上海記録の中にその後の原点を見ようとし、そのほか上海インテリ層との交流社会風俗状況、市場状況、太平天国軍や西欧列強などとの攻防の受け止め方を丁寧にまとめている(7)。とりわけ通詞の資料から派遣船の調査目的が紹介されているのは興味深い。しかし、結論で、藩士たちへの感想の中に、日本帝国発展を目指す動きが見られると一般化する点は、観念論的だと思われる。初めての上海の新鮮さ、それも極めて特殊な状況の中で、欧米への反発や日本への危機感も感じつつ、後述するようにもっとも上海で活動し、欧米の侵略下においてもなお清国の伝統や規範を強く信用し憧れていた名倉のような藩士の存在は、当時の日本人の清国への憧憬が強くベースにあったからであり、性急な結論は無理があるように思われる。

また、閻立は幕末期の日本からの上海へのたびたびの派遣船について、上海道台(8)や道台および総理衙門が、当初の朝貢貿易扱いから、条約国扱いの体制へと対応して行く状況を清国側の資料を用いて明らかにしている(9)。さらに、黄栄光はこの千歳丸と次の健順丸の派遣

に関する清国側の道台と政府の間のやり取りの過程を台湾にある中央研究院の文書を使って明らかにしており、これにより派遣船をめぐる日清関係が立体的に明らかにされた[10]。

そのほか、各藩士の記録については、後述するように詳細な紹介や研究がなされている。

全体としてみると、上海を訪ねた若い藩士が目の前に展開する諸現象に対して新鮮に驚き、それが記録された内容から、藩士たちの思考を浮かび上がらせ、それを検討することと、清国側の政治的対応を検討するという大きな流れがあり、上海の個別的問題はその前者の中で検討されてきた。

その点からみると、藩士の多くが上海の町の中を歩き徘徊したことによる空間行動に伴う上海の認識については把握されていない。前号で扱った納富の日記は、そのほとんどが体調を悪くして部屋にとどまり、そこへやってくる様々な上海人との筆談から描かれた上海像ではあった。そのため、その上海像は空間のない一元的世界であり、すぐれた記録ではあれ、自らが現地で確認できた立体感のある 2 次的、3 次的世界ではなかった。1 次的平面像ではあるが、それでもその平面の中に広がりもない、いわば抽象化された世界だったといえる。それは当然上海認識において空間的、かつ立体的世界が欠落していたのであり、そこが日比野の空間的、立体的に記録された上海認識の世界とは違った[11]。対する一方、日比野の場合は、この時期の上海が、混乱の中でも都市形成や近代化の場所的、立体的展開とその原理がその記述から読み取れた[12]が、納富の場合は上海をめぐる言説にとどまってしまった。

そこで今回の本稿では、前述したように上海を歩き回って徘徊した 3 人の日記を取り上げ、その行動空間と彼らの空間認識のレベルとの関係、およびそこから我々がくみ取れる上海の空間性についても検討してみたい。

3. 3人の日記記録者の上海へ行くまでの経歴

ここでは前号で示した基準のうち、上海をそれぞれ差はあるにしろ、十分に徘徊できた 3 人の日記を選んだ。

その 3 人とは、名倉予何人（あなと）、中牟田倉之助、高杉晋作である。うち、中牟田と高杉は、木村伝之助とともに上海上陸後、同室で生活した。ここではこの 3 人の経歴について上海へ行くまでの分の略歴についてみておく。

(1) 名倉予何人

名倉については春名徹が詳細な人物紹介をしている[13]。すなわち、簡潔に紹介すると、生まれは現在福島県の棚倉、本名は松窓、名は信教、号は予何人、一時野田重次郎と名乗っている。江戸の昌平黌で学び、洋楽や兵法を学んだあと浜松藩に入り、この時、選ばれて幕府の役人鍋田三郎右衛門の従者として千歳丸に乗船した。上海にはその後 2 回、さらにフランスへも出かけており、豊富な海外経験は突出していた。

(2) 中牟田倉之助

中牟田倉之助の略伝についても春名徹による紹介がある[14]。それを踏まえ簡潔に述べる。中牟田は天保 8 年（1837）、佐賀藩士金丸文雄の次男として生まれ、のち母の弟の中牟田武貞の養子となり、中牟田姓となった。藩の蒙養館（小学）から藩校弘道館で儒学を学んだ後、蘭学を学び、長崎の海軍伝習所で航海術、砲術を総合的に学んだあと、さらに英語を習得、

海軍の実習などの経験も積んでいる。幕府から長崎の海防警備を任されていた佐賀藩の人材養成の期待を担っていたといえる。幕府の派遣船事業では藩命により、塩沢彦次郎の従者としてそれに参加した。このように英語ができた中牟田は、上海での行動パターンにも後述するようにその特徴が出ている。

（3）高杉晋作

高杉晋作の略歴については『東行先生遺文』(15)を踏まえ簡潔に紹介する。

高杉は天保 10 年（1839）に長州萩に生まれ、安政 4 年（1857）に、萩明倫館、同年松下村塾に入り、翌年には江戸昌平黌に入るや 1 年後には退学、翌年には軍艦教授所、直後に明倫館舎長として呼び戻され、その 2 週間後には再び江戸へ、9 か月後にはまた明倫館舎長、そして半年余りのちには再び江戸へ、と目まぐるしく移動を繰り返し、落ち着きがない。そして翌年、上海へ向かうことになる。一説には尊皇攘夷思想に傾き、やたらに外国人を切りつけるので高杉が問題を起こさないように桂小五郎が上海へ送り出したともいわれる。もちろんこのことは高杉を讃える前掲書には記されていない。高杉のこのような落ち着かない経歴は、後述するように上海での行動にも反映しているように見える。

4．3人を迎えた当時の上海

上海への旅立ちについては、前号で触れたので、ここでは繰り返さない。

ここでは、この 3 人を含めた一行の乗る「千歳丸」を迎えた当時の上海の状況についてまず触れておく。詳細は専門書に譲り、ここでは 3 人の日記に関係しそうな状況についてのみ触れておく。

上海は 13 世紀後半に元朝が貿易管理の役所を設けたことが契機となり、町の形成が見られた。1292 年、松江府上海県が設置され、それが行政枠を持つ上海の登場となった。16 世紀の半ばには倭寇の被害を防ぐため、上海の町が城壁を張り巡らすことで誕生した。周囲約 6 キロメートル、堀の幅 18 メートル、深さ 5 メートル、城壁の高さ 7 メートルほどの規模であり、東の黄浦江に臨む側に小東と大東、南側に小南、大南、西側に西、北側に北の各門が設けられた。のち、太平天国戦争直前に小刀会が 1 年あまり上海を支配したことがあり、その鎮圧のために新北門がフランスによって開設されている。1862 年、千歳丸到着の直前のことであった。

上海の飛躍的な発展は、1842 年の南京条約により、上海が、広州、福州、厦門、寧波の各港とともに開港され、まずはイギリス（1843）、アメリカ、（1848）、フランス（1849）を中心に租界が形成され、貿易の活発化とともに拡大したことによる。当初租界はそれら外国人が多く、清国人は 500 人ほどであったとされ、上海は楕円状の壁に囲まれたまだほとんど県城が中心の町であった（図 1）が、1860 年に太平天国が南京に進出してそこを都に制定すると、隣接する上海も狙うようになり、上海を取り囲むようにして波状攻撃をするようになり、郊外や太平天国支配下から逃げ出した多くの難民が上海に避難民として流入するようになった。特にイギリス、フランス軍は当初中立の立場を取っていたが、被害が自国租界にも及ぶようになり、また清国側からの要請もあって、清国軍と共闘する形で太平天国軍と対峙することになり、町の要所に両国の軍隊が堂々と姿をあらわすようになった。千歳丸の上海到着はそんな状況下であり、危険な上海状況が日本側にはきちんと伝わっていなか

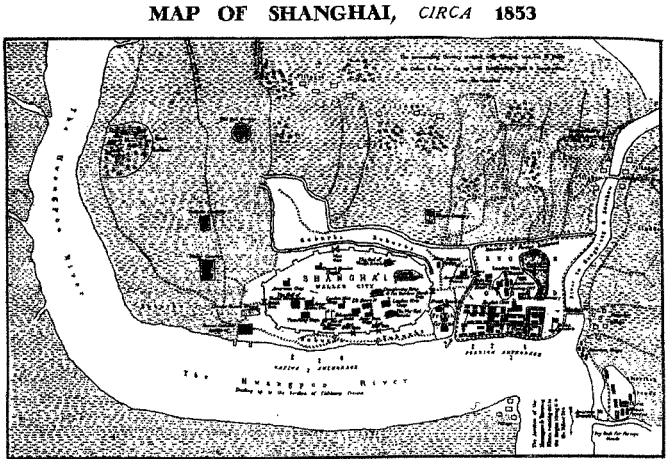

図 1 1853 年の上海（Oriental Affairs 1938）（地図の右下が北方面）

ったものと思われる。貴浦江へ千歳丸が入ると突然の砲性が聞こえたり、陸上で火の手が上がったりするのを見て、本物の戦争を知った乗組員たちはびっくりし、不安になったりしている。

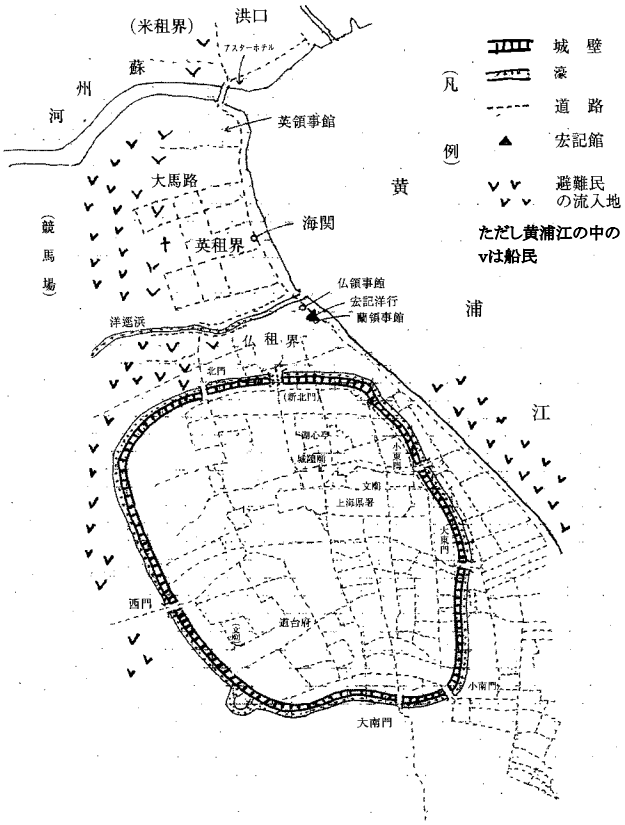

図 2 1862 年頃の上海地図（藤田原図）

避難民は城内を目指すが、そこへ入れない避難民は各門外に住み着き、そこから租界内へあふれ込んでいった。黄浦江河岸には次々と荷揚げ場が造られ、港のバンドが形成されるが、その一帯を避けた南方に接続する河岸には、黄浦江へ流出する水路である薛家浜を中心に舟を操ってきた無数の避難民たちの舟が集中した（図 2、前号の 2 葉の図の原図）。それが千歳丸の一行には、まるで櫛が林立したような猛烈な景観にみえた。

そんな中で租界の拡大が図られ土地章程の改定も図られていく。千歳丸が到着した 1862 年にはフランス租界がイギリスとの合同から独立し、翌年にはアメリカ租界がイギリス租界と合併し、共同租界となり、のちには日本人もそこへ入っていくことになった。

しかし、避難民が押し寄せ、また拡大する租界地は地形的には沖積地で、しかも多湿な沼沢地が多い。

そこに避難民が入り込む混乱はかなりあり、それをどのように基盤整備しながら街づくりをするかは租界を運営する工部局にとって大きな課題にもなっていた。街路を通し、東西の道路には国内の都市名、南北の道路には各省の名をつけるようになるのは1865年のことであり、租界内の都市計画が実施されることになり、今日の上海の都市基盤が形成されたということができる。千歳丸時代のイギリス側の租界では大馬路については記録されるが、まだその程度であった。

一方、県城内は、前述したように、それほど広くはないが、当然黄浦江沿いの各門を中心に貿易業や商店、各種団体、そして道台（13 宮内の図について）などの役所、学校、などが集積し、ほかの門も門近くに色々な施設が集まっていた（図3）(16)。しかし概して西側の城内にはまだ農地や湿地が見られたことは前稿の中で、日比野の観察として紹介した(17)。

以上のように、列強諸国の進出の中、国内の敵との戦いと列強諸国との連携、さらに避難民がもたらす新たな上海の変質と発展というまさにそのダイナミクスの中へ千歳丸は突っ込んでいったのである。

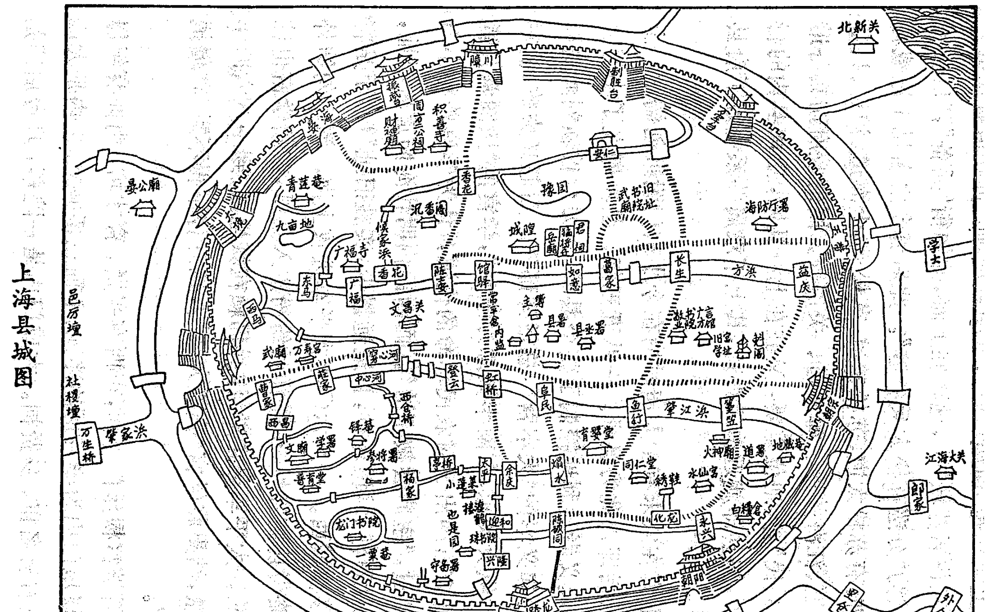

図3　1860 年頃の城内図（譙枢銘ら（1984）『上海史研究』より）

5．3人の上海での行動と観察

（1）それらの記録の出典

次に彼ら３人の上海での記録を基に、その行動空間とそれぞれの観察事項を検討する。

そのもとになった記録は、残されている毎日の日記である。各藩から選抜された従者たちは、それぞれその使命を帯び、またその目的のために当然毎日の記録を重視したと思われる。今日では前述したように彼らのほとんどの記録が読めるようになっている。

まず名倉予何人の日記は『海外日録』（影印本）である(18)。これは日記の形をとるが、そ

れとは別に『支那見聞録』として、観察事項についてのかなり詳細なメモ的な記録も残している。前掲の日記内容と関連するところも見られ、極めて興味深いが、これについては別稿で取り上げたく、ここでは前者の日記である『海外日録』を中心に取り上げる。

この名倉の日記記録については、すでにいくつかの先行研究がある。この 3 人の中だけでなく、千歳丸一行の中でも名倉ほど繰り返し清国を訪問し、さらに中近東からフランスにまで出かけた海外経験者はいないので、千歳丸での記録に加え、その点が研究者の関心を呼んだということであろう。古くは佐藤三郎[19]が先発し、春名徹が[20]、名倉の素性来歴だけでなく、日記の考証をはじめ、かなり名倉を取り上げるうえでの基礎的調査研究を重視しており、後進の我々研究者にとってありがたく、参考になる。しかし、上海それ自体についての経験記録にはあまり踏み込んでいない。春名はさらに上海だけでなく、中近東からヨーロッパ体験による名倉の異文化との対応にも検討し、記録の中では、千歳丸の記録が最も充実していることをにじませている。森田吉彦も同様な関心を持って名倉にアプローチし、兵学に卓越する名倉の関心をその面から分析し、日清関係の協力思想を名倉が展開したとみている。なお田﨑哲郎はこの『海外日録』を影印本から翻刻している[21]。

中牟田倉之助の日記は、『上海行き日記』[22]で、これも春名徹による翻刻の労作で、特に本文に付せられた注の部分がまさに本文を読み解く際の参考になり、その内容も興味深い。これに合わせて、中牟田の上海での行動観察の中で、上海の人たちとの交流のほか、多くの書籍や地図を求めた点を高く評価し、地図、書籍、英語文献などの収集の中身を一覧して紹介している。本稿を執筆する筆者は地理学が専門だが、そこに紹介された地図類は閲覧したいものばかりである。また、欧米人名として理解されがちな名前は、いずれも会社名だと注意を促している。欧米では人名を会社名にしているケースは多い。また、春名は、中牟田の『公儀御役役　唐国上海表にて道台其外と応接書』についても翻刻を行い、丁寧な注を付している[23]。清国側との交渉記録ともいうべきもので、当時の清国をめぐる国際情勢や貿易、課税、物価、条約、土地の利用取得など、幅広い議論がトップの役人たちが、道台や各国領事館のトップたちと交わされていたことがわかる。

最後に、高杉晋作であるが、その記録は『遊清五録』のうち『上海掩留日録』[24]によった。高杉は明治維新以後、その目立つ尊王攘夷のための暴力や編隊の指導を含む活動もあって知名度は高く、カリスマ的であり、この千歳丸による上海への航海も、彼がまるでその代表であったかのような扱いを受けており、高杉を中心にした研究も多い[25]。前述の宮永孝はこの千歳丸の上海行きを高杉の名をタイトルにつけて著書として刊行しているし[26]、中国人研究者の馮も高杉を中心的に扱っている[27]。しかし、現地での高杉の実際は、後述するように名倉や中牟田と比較するとそのレベルや存在感はかなり低く小さい。そのことはすでに春名がなぜ高杉ばかり取り上げられるのかのかと強く主張している[28]。研究史からみると、千歳丸を取り上げる研究者は、高杉だけしか目がいかない先入観がつきまとっていたものと思われる。明治維新という政治状況の変化、つまり具体的には新たな藩閥政治が、彼らの実力とは異なる形で高杉だけを上へ押し上げたということになる。

（2）3 人の行動と観察

では限られた日数の中でこの 3 人はどのような行動と観察をしたのであろうか。表 1 はその 3 人について、呉松へ入った 5 月 5 日から上海を出発する 7 月 5 日までの上海滞在中の毎日の行動と観察事項についてそれぞれの記録から要約する形で示したものである。行

表1-1.　上海滞在日記からみた名倉予何人、中牟田倉之助、高杉晋作の日別行動・空間と観察（1）

訪問者	名倉予何人		中牟田倉之助		高杉晋作	
事　項	行動と空間	観　察	行動と空間	観　察	行動と空間	観　察
5月 5日	船は長江から呉松へ	両岸堤、村落、失火				
5月 6日	呉松から上海へ 點耶洋行、街へ	港内船舶数の多さに驚嘆	上陸、オランダ領事館（點耶洋行）	曳船の規模、各船の旗、上海の船	船内	長毛賊との戦う音、飲料水としての濁水
5月 7日	官船内	一木一草	ｵﾗﾝﾀﾞ領事館、洋人居留地巡り、宏記館	千歳丸の新聞記事		
5月 8日	點耶洋行 道台へ　小東門	街、道台建物、道台衣装	道台府へ、城内洋人居留地巡り	道台府への隋行員、城内の狭い道、観衆		
5月 9日	宏記洋行へ		荷揚げ。夜半下痢		荷物運び上げ （官吏は宏記洋行へ）	中牟田から航海学を学ぶ
5月 10日	點耶洋行へ	「上海新報」を読む	下痢（水による） 館内（高杉と）	医師未診 数人の下痢病人	館内	長毛賊は上海へ3里
5月 11日	點耶洋行、港の船を見る。宏記館へ	「唐人」群集に囲まれる。琉球人かと	快方へ		館内	中牟田から航海術
5月 12日	フランス西館	同館の商品の寄観	館内（役人はフランス領事館へ）		英書を読む、フランス領事館	フランス領事は代理
5月 13日	點耶洋行	「新報」から賊兵の様子。荔枝食す	館内（役人はｲｷﾞﾘｽ・ｱﾒﾘｶ・ﾛｼｱ領事館へ）		英・米・露領事館	大砲小銃を見る。大橋完成
5月 14日		渡辺与八郎死去（濁水による）	館内 フランス兵上陸	伝次郎死去（コレラ） （薬師）、下痢は半数	上陸から1週間館内	英書読む。渡辺の従者の死は空死、無益。フランス兵上陸。軍艦
5月 15日	馬路街、城内巡り 河沿	昨夜水夫兵吉死去、書店、家船	館内	朝銃声、水夫兵吉死去（コレラ）		水夫兵吉死去 清人3～4人来訪
5月 16日	船内	生許氏、唐人筆談	船に乗り英船上のリッチャルトソーに会う	病気全快。英船主訪ね海図求めたいと。英番兵と通行もんちゃく。	馬路巡り。書籍求む	砲声、名倉の詩に韻つける
5月 17日	日比野、納富と馬路から城内、南門外	納富急病、呉峩士、儀と陳汝欽、猛暑	米人フォッグへ。売却ズミ蒸気船を中山、五代	高杉、五代、ﾄﾝﾌﾟﾘｯﾁと共に。82₩	蒸気船を見る。暑い	川蒸気船
5月 18日	城内巡り	燈、骨董、書坊	城内書店、乙と英人デントを訪うが留守		古玩具屋（香沪）	
5月 19日	西門へ	侯と陳汝欽訪問と来訪	旅館主に英語教えてと	旅館主は教えることをＯＫ	馬路外書店	留守中の名倉を訪ねた陳汝欽と筆談
5月 20日	侯と陳へ手紙	アメリカ船失火	米商人ﾌﾗｯｸﾞ、さらにﾏｯｹﾝｼﾞ、ｵﾗﾝﾀﾞ人ﾄﾘﾑﾌﾟﾘﾝｸ、ｽｷﾝﾄﾞﾙに会う	米蒸気船焼失。海図を探す。スキンドルから英語	米商人チャルス（中牟田と）、西門兵営	米商人チャルスとのこと、陳と筆談、米船失火
5月 21日	小東門から隍、西門	城内の農地と墓 侯、陳訪問	仏領事館	米船失火の理由	古道具店で書を看、欧米下の上海を議論	書を書いて名倉にわたし、陳汝へ贈る
5月 22日	館内	唐人と会話	ﾏｯｹﾝｼﾞ、大馬路外の書店、ﾐｭｰﾙﾍｯﾄﾞ、蘭領事館、旅宿主	ﾏｯｹﾝｼﾞｰ宅で海図みる。ﾐｭｰﾙﾍｯﾄﾞ宅でｱﾒﾘｶ誌購入	館内（雑談）	
5月 23日	興聖街、新北門、傍街巡り	張玉書（儒医）、揚溥、方瑤郷、劉文滙（兵）	館内（留守役）	借用書の書写、道台、蘭領事館へあいさつ	ミュールヘッド訪ねる（五代と）	仏蘭領事仲介で道台や士官来訪
5月 24日	館内	華毓慶（避難民）来訪。猛暑86₩	江南海関訪問 英人ロジーと会話	米商船ほか3艘が破損。ｺﾝｽﾀﾝﾁﾉｰﾌﾞﾙ図	従者は官船へ	日清両国の筆談あり
5月 25日	館内		蘭領事。英人ら買物。海図求む。英人パーカーら	ホルツ商会。パーカーと面談。コノープ	ミュールヘッド（不在）	アメリカ船爆発
5月 26日	北門、関帝廟、西門	劉文滙、侯と陳らを訪い筆談	蘭領事（海図）。蘭商船をみる。城内巡り	唐人たちから見られる。中牟田は商船検討	蘭商船 馬銓来訪	蘭商船をみるが、手が出ない
5月 27日	下流の船修理ドッグへ	ドッグ（広東人からアメリカ人の手へ）	英人ﾐｭｰﾙﾍｯﾄﾞ、字林洋行、ﾊﾟｰｶｰ、ｺﾉｰﾌﾟ、ﾘｯﾁｬﾙﾂ、ﾎﾟﾙﾄｶﾞﾙ人ｶﾙｳｪﾙﾎｰ	セーバーで珍物みる。リッチエルに筆100本わたす	ミュールヘッド（中牟田と）	上海新報、数学書、代数学の書購入
5月 28日	一雲庵、南門、西門、関帝廟	方丈、薬師仏、道士、侯と陳、馬銓来訪	館内		本屋来訪	
5月 29日	新北門、西倉橋、城内巡り	馬銓を訪う。城内の不潔さ	馬銓を訪問（名倉と）		本屋来訪	
6月 1日	新北門、西倉橋	馬銓を訪う	蘭領事館 仏領事館	蘭領事館より絵図2枚	館内（風雨のため）中牟田がいるので安心	
6月 2日	館内	路人群衆に見られる	英人ミュールヘッド、仏人の時計師、病院	北京条約を知る 病院の状況	馬銓訪ねる（役人と）	城内市街地狭い
6月 3日	新北門、一雲庵、文廟、英館	文廟占居の英兵	蘭領事館（書籍購入の相談）			
6月 4日	晩に川辺散歩	避難民の多数の家舟と尿桶			城内を巡る。書店、本屋来訪	
6月 5日	館内	『粤匪記略』 唐人から柏樹	蘭領事館、英人ノープ、馬銓来訪	海図入手 上海商船154艘		
6月 6日	小東門外諸坊	書画商人来訪、三品以上の行列、『金陵…歌』	米人ﾏｯｹﾝｼﾞ（深川長兵衛一行と）ﾎｰﾙ、船ドック、字林洋行	ドックを細見 気温90₩	館内（雑用）	猛暑90₩
6月 7日	北門、西倉橋	侯と陳、米英通 馬銓訪い兵器見る	館内（名倉と交代）		道台、城外・南大門、西門、関帝廟	孔子廟は英人軍隊占居

表1-2.　上海滞在日記からみた名倉予何人、中牟田倉之助、高杉晋作の日別行動・空間と観察(2)

訪問者	名倉予何人		中牟田倉之助		高杉晋作	
事　項	行動と空間	観　察	行動と空間	観　察	行動と空間	観　察
6月 8日	館内	馬銓来訪	城外南川沿い、大東門より城内。小東門ストップ	城外に死人棺 仏兵番人を説得	千歳丸(五代がいる)蘭領事館で銃と地図	京摂間で事変があったと。心が飛びはねる
6月 9日	北門、西門、小南門、裡倉橋	田畑、民居、家畜、避難民、王亘甫宅	北新門で仏兵士と議論。千歳丸。五代と談合	山崎卯蔵を見舞う		
6月 10日	海関、砲台、新北門、防所、馬洛街	厳伯雅(知府)、劉文滙、詩集	市中巡り(深川一同と)、江雪圃、浦祝山、台場	江国棹の書、扇入手。台場の英兵		
6月 11日	西門、西倉橋、駐防、王亘甫宅、操場へ	侯と陳、馬銓、王亘甫、李撫軍の操場	仏領事館、ﾄﾝﾌﾟﾘﾝｸﾞ、英人ﾛｰｾﾞﾝ、ﾁﾞｯﾀﾝ。巡り	条約中の物産扱い。物価、市中巡り		
6月 12日	館内	李撫軍の侯徳斉来訪	海関フェッチロイ、英人ミュールヘッド	約定書。長毛賊について4冊借用	城内巡り	
6月 13日	新北門から城内巡り、山東門へ	昨夜、李撫軍が長毛と戦い勝利したと	トンプリング 写本	図面入手。物価	中牟田と夜門外へ 米人宅へ	米人は日本開港と信頼できる藩を尋ねる
6月 14日	館内	オランダ人ドンブリンク来る。岩瀬弥四郎。碩太郎死去す。	西門外(調練)。南大門の支那兵。造船所海関のフェッチロイ	調練の様子。清兵の出身地、造船所の規模。碩太郎死去	西門外へ(中牟田と) 南大門の玩松	兵法のうち陣屋は西洋法。玩松は長毛賊を防いだ。西洋銃の成果
6月 15日	西門、西倉橋、李撫軍、王亘甫宅	李撫軍、陳、王亘甫、侯将軍				
6月 16日	館内		買物(時計、ピストル、高杉と) 英人コープ、ミュールヘッド	浦祝山より扇書もらう	米人店(七八銃。中牟田と)　清人を訪ね書、詩、扇を	
6月 17日	馬路街、西門、李撫軍操場、南大門	張氏の営		荷造り、宿へ支払い、英人10人採用		
6月 18日	官船と往復、城内巡り	(直接帰国することに決定-失望も)	米居留地巡り、英領事館でアームストロング砲。台場コープ	英船規模、アームストロング砲規模、コノープの書	中牟田と英人砲台みる。五代来訪。仏店でピストル購入	アームストロング砲6口ありと
6月 19日	新北門、防所、西門、南大門、理倉橋	侯と陳へ別れ、王亘甫宅で別れの宴	館内	賊の書を写す		
6月 20日	夕方河岸散歩のみ	昨夜歌舞見る	館内	賊の書を写す		
6月 21日	館内	王亘甫から使者 贈り物	館内	賊の書を写す。後藤又之助、石倉逓之助から書状届く		
6月 22日		侯へ送別の詩贈る。侯はすぐれた人材	新聞紙屋、兼吉に会う。英人コープ、フィス	船乗込み遅れる		
6月 23日	新北門、小南門、西門、李軍営、王亘甫宅	王兄弟の武学、送別に参集してくれる	館内	賊の書写し		
6月 24日	館内	ロバ多い	館内	賊の書写し		
6月 25日	大東門、道台		館内	賊の書写し		
6月 26日	新北門	劉文滙に会う。知府周存伯から書画	字林洋行(深川らと)、米居留地、英陸軍ｽｰﾛｰｳｰﾘｰ、英領事館、ｶﾙｳｪﾙﾎｰﾙ、ｾｰﾊﾞｰ、浦祝山ら	新聞と上海暦、天津新報、通商条款などを購入した		
6月 27日	搬出の監視	支那物産の搬送	海関、蘭領事館	英字新聞は借用		
6月 28日	西門、李撫軍操場、理倉橋	王亘甫宅へ。侯将軍たちから歓迎	時計屋(高杉と) 新聞店へも	日本の争乱を知る。18大名国元へ帰るなど	時計屋(中牟田と) 新聞店へも	
6月 29日	出航準備		海関、新聞店へお礼、ﾐｭｰﾙﾍｯﾄﾞ、ｺﾉｰﾌﾟ、時計店(高杉と)		時計屋(中牟田と)	
6月 30日	小北門	劉文滙不在で会えず	積荷、道台、江棟、コノープ、パーカー、ミュールヘッド	世話になった人々へのお礼や贈られ品		
7月 1日	小北門、西倉橋	劉文滙とのお別れ。馬銓を訪う	積荷	役人たちも乗込み		
7月 2日	官船の中	日本人48人、オランダ人10人	出航用意。神奈川英人ミニストルへ浪人切入り			
7月 3日	東門、小南門、河辺	巡撫院の通行、黄江濁水へ明礬				
7月 4日			総勘定支払	税制の書写し		
7月 5日			午後出航			
7月 6日			呉松発			
7月 15日			長崎着			

動は場所の移動を伴うことが多く、その移動は移動空間とみなし、またその移動は目的を持っているため、その目的は観察にもつながる。人に会うこともあり、その人から情報をもらうことが多く、その分も観察事項の中に含めた。移動せず室内にとどまっている場合でも外来者の訪問を受けたり、書写などの室内での作業を行った場合は取り上げた。

それによると、まず名倉予何人と中牟田倉之助は、上陸滞在 59 日のうち、ほとんど毎日外出している。宿舎である宏記館内にいたのは、名倉は 14 日、中牟田は 19 日で、名倉は留守居役の日がその多くを占め、中牟田も留守居役の日と到着した当初の下痢をした日、それに帰国が近づいた 6 月下旬以降は、借用した書の書き写し作業の日々がその多くを占める。それに対して、高杉は日記に記録のない日も加えると合計 31 日と多く、滞在日数の過半を宿舎内で過ごしていたことになる。上陸直後の一行が上海道台を挨拶訪問する時も、名倉と中牟田は参加し、小東門から初の城内の道台府までの通りの狭く汚いことなどを興味深く観察し、多くの参集した群衆の好奇心の目にさらされたこと、道台である呉煦の服装やシンボリックな羽根のついた帽子などを観察している。そしてそのあと英語ができる中牟田は早速欧米人の居留する租界を徘徊している。しかし、高杉は病気だとしてこの訪問に参加さえしていない。前述のようにそもそも落ち着かぬ経歴と一途な攘夷思想を持った高杉にしてみれば、おそらくは望まなかったのであろうこの上海行き、それも嫌いな幕府の主催ということで、この上海行きには斜めに構え、偏屈感がただよっているようにも見える。

全体としてみれば、この 3 人の中で名倉が最も積極的に上海の町の中を徘徊しており、その後の高杉の態度と比較しても、極めて前向きである。そして春名徹は、名倉の記録は、この上海訪問が室町氏以来の稀有なこととして巻頭言に記すなど、かなり体系的だとしている(29)。名倉は、江戸昌平黌で兵学を学んだとされ、明国以来の兵学の先進地と思っていた清国で、江戸時代に戦闘がなくなった日本では文献だけで知る戦闘の実際を、上海でより生々しく見聞したいという志が記録文の中に読み取れる。しかし、役人の従者という身分であり、それを求めるには自ら動かなくてはならなかった。オランダ領事館の新聞で長毛賊との戦闘状況を情報として集め、馬路などの書店で兵学の書を探すが、見つからなかった。そんな中 5 月 17 日に日比野、納富と町へ出書生の顧兄弟に出会い、小さな糸ができた途端、納富が急病で倒れ、宿へつれて帰り、中断。しかし、その午後、単身で新北門から城内奥深くの孔子廟である文届で避難民の呉峩士と筆談で知り合い、そこがイギリス軍の仮基地であることを知り、さらに彼の案内で西門のイギリス軍の基地を見ることになった。そこでイギリス兵と会い、簡単なやり取りをし、名倉の世界に太目の糸がつながったのである。なおこの時、儒者の儀と陳兄弟にも会え、その後この兄弟と親しく交わることになる。なお、この兄弟はその二日後、名倉を訪ねて宿舎へ来るが、名倉は留守、そこにいた高杉と簡単な挨拶の筆談をしている。高杉にとってこれが最初の上海人との会話であった。

名倉は、西門の軍事基地を知り、この後、各地区を徘徊しながら西門へ出かけ、西門近くの西倉橋では、官吏の馬栓と知り合っている。もっとも前号で示したように日比野も知り合い、虚飾の多いところがある人物だと記録されている。そして 6 月 7 日には馬栓からイギリス、アメリカの兵器も見せてもらっている。しかし、欧米の兵学については好んでいない。そして小東門外の裡倉橋で偶然王一族に会っている。王は上海の豪族かつ資産家で身内には軍にも絡むさまざまな人物がおり、名倉が日本の武士であることとその信義の強いことが理解され、王家の家族ぐるみの付き合いに発展することになった。その後たびたび王家を訪ね親しく交わりを進めるうちに、ついに上海西郊で基地を持ち、軍事訓練を行う李撫軍の

操場で念願の軍事訓練を見学するに至った。名倉の志が達成された瞬間であった。兵学を極めたいとする名倉の志の筋が名倉の記録から以上のような形で見えてくる。帰国の際には王家の親族や侯将軍をはじめ、さまざまな多くの人たちと送別の会や贈り物の交換をしており、名倉こそ兵学を中心に置きながらも、上海の各層の人たちと広く交わった、今日からいえば日中友好のまさに先駆者であったといえる。のちに名倉が上海へ来るたびに王家とは親交を結び、名倉の上海での最も親しい友人となった。

一方、中牟田は、上陸当初は黄浦江の水にやられ、同行した水夫たちが次々亡くなる中で自粛し、やっと5月16日に全快すると、それまで抑えていた行動欲が爆発するかのように、そのあとの1か月間は上海の町へ飛び出している。

中牟田はこの派遣団の従者の中では唯一英語ができた人物である。そのため名倉とは異なり、欧米への理解もあった。そこで中牟田はオランダやイギリス、フランスなどの領事館を訪ね、様々なイギリス人を中心にアメリカ人、フランス人の貿易商、船道具屋、書店主、宣教師、船主、船のドッグ、などを訪ね、海図を含む地図類や欧米出版物、長毛賊に関する書籍や記録、条約、商船事情に関する書籍や書類などを購入したり、借用し、発問もしている。とくに城内のイギリス教会の宣教師であるミユールヘッドに対しては繰り返し訪問し、書籍の購入や借用を依頼し、帰国前には連日、それらの筆写を集中的に行っている。滞在中、上海在住の主な欧米人にはほとんど会っているように思われる。

以上からみると、中牟田は上海を通じてもっぱら国際事情、国際関係の理解を書物と現実から深めようとしたやや研究者的な人物であったように思われる。

最後に高杉だが、簡潔に言えば、上海の町や人々にはほとんど関心がなく、もっぱら仏英租界の店でピストルと時計を求めることに関心があっただけということになる。しかも、それらピストルや時計を求めるときは、同室者である中牟田に同行してもらっており、上海の町での徘徊見聞はこれも中牟田頼み、ときに五代（薩摩藩から水夫として乗り込む。のちの五代友厚）や役人と一緒であり、高杉が単独で町歩きの徘徊をしたケースは少ない。アームストログ砲を最後に見たのも中牟田頼みであり、ミユールヘッドから数学書を購入したのも中牟田頼みであった。日本から京坂間で事変があったという情報も五代からの情報である。このように、とりわけ中牟田への依存度は強く、風雨が強い日、その不安な気持ちを中牟田と一緒にいるから大丈夫だ、と記していることからも、高杉の気持ちの中には中牟田の存在が極めて大きかったといえる。中牟田なしでは上海の町は歩けなかったことが浮かび上がってくる。高杉が同行者の中で、中牟田以外とは語るに値しない、と豪語して記録しているが、これは単なる強がりであることがわかってくる。多くの研究者が上海での高杉について中心人物だとして論述していることについては再検討が必要だと思われる。

（3）3人が会った人々

以上の3人の行動、観察の流れの中で会った人たちについて、表2は名倉について、表3は中牟田、表4は高杉について、一覧表にまとめたものである。

表2の名倉についてみると、当初のオランダ、フランスの領事館関係者を別とすれば、前述したようにそのほとんどが清国人であり、上海人である。全体の流れの中で、侯と陳兄弟、遅れて馬栓などを契機として人脈が次々と広がる一方、やがて本命として現れる王一族へと収斂していく状況がわかる。全体としては延べ88人以上の人たちと会っていることがわかる。

表2.　　名倉予何人が対話、対面した相手一覧表

月　日	対話、対面した相手
5月 6日	蘭領事館
8日	蘭領事館
	道台（府）
10日	蘭領事館
11日	蘭領事館
	唐人
12日	仏領事館
	蘭領事館
13日	蘭領事館
15日	書店（馬路）（大東門外）
16日	来訪した生許
17日	顧麟顧鬻兄弟（南馬路）
	文廟
	呉峩士（避難民）
	儀、陳汝欽
	英人
18日	燈舗、骨董舗、書店（城内）
19日	侯儀と陳汝欽（西門）
21日	侯儀と陳汝欽兄弟（西門）
22日	唐人たち（館内）
23日	揚溥（奉賢県知県）
	方瑤郷（浙江巡察官）
	劉文滙（兵士）
	張玉書（儒医）
	童児（茶房）
24日	来訪した華毓慶（避難民）
26日	侯と陳兄弟（西門）
	朱逸山（道士）
	劉文滙（北門）
27日	船ドック
28日	一雲庵方丈
	道士（関帝庙）
	侯儀（立ち話）
	来訪した馬銓
29日	馬銓（西門）
6月 1日	馬銓
3日	一雲庵
	英吏数人（文廟）
	英領事館

月　日	対話、対面した相手
6月 6日	来訪した書画商人
7日	劉文滙
	来訪した一奴
	馬銓
	儀、陳兄弟
	英米通
8日	来訪した馬銓
9日	王亘甫一族
10日	劉文滙
	知府厳伯雅（文武兼傑士）
11日	侯、陳兄弟
	王亘甫
	侯徳斉（操場を紹介）
12日	来訪した侯徳斉（営士）
13日	諸友（北門）
14日	トンプリング（蘭人）
15日	陳汝欽（侯儀は病）
	王亘甫
	侯将軍
17日	諸官（新北門）
19日	防所へ（新北門）
	侯、陳へお別れ
	馬銓（西倉橋）
	王亘甫一族とその客
23日	陳汝欽
	李撫軍軍営を見る
	王亘甫と兄弟
25日	道台
26日	劉文滙
	（知府周存伯より書画届く）
28日	李撫軍の朝練を見る
	王亘甫と将軍
30日	劉文滙（不在）
7月 1日	劉文滙
	馬銓
3日	巡撫院の通行をみる
	薛家浜地方を巡る
計	延　88人以上

表3.　中牟田倉之助が対話、対面した相手一覧表

月　日	対話、対面した相手
5月 8日	呉煦（道台）
12日	仏領事
13日	英、米、魯領事
16日	リチャルトソー（英人）
	英番兵
17日	フォッグ（米商人）
	トンブリンク（蘭）
19日	スキンドル
20日	フォッグ（米）、リッチャルズ（米）
	リッチャルトソー、マッケンジー
	ドンブリング、スキンドル
21日	仏領事
22日	マッケンジ、ミュールヘッド（英）
	スキンドル、蘭領事
23日	蘭領事と役人達
	呉煦
24日	ロジー（英、海関）
25日	蘭領事、ホールマントホルツ商会
	パーカー（英）、コノープ（英）
26日	蘭領事
27日	ミュールヘッド（英）、セーバー
	バーカー、コノープ、リッチャルツ
	カウェルホー（ポルトガル、印刷、文具）
29日	馬銓
30日	蘭領事、仏領事
6月 2日	ミュールヘッド、時計師（仏人）
	ケンドル（医師）、魯人
3日	蘭領事
5日	蘭領事、コノープ
	馬銓
6日	マッケンジ（米）、ホール
	船舶修理所員、字林洋行
8日	仏兵門番、同頭
10日	江雪圃、浦祝山、方錫園
	コノープ
11日	仏領事、トンブリンク、ローゼン（英）
	ヂッタン商会（英）
12日	フェチロイ（海関）
	ミュールヘッド（英）
13日	蘭領事、トンプリング
14日	ミュールヘッド（英）、フッチロイ（英）
	テント（英）
16日	西洋店、コノープ
	ミュールヘッド
18日	英領事、英船士官、スチーウーリー
	ホイック、仏人店、コノープ（英）
	ミュールヘッド
22日	コノープ
	フィス（英）
	（右上へつづく）

月　日	対話、対面した相手
6月 26日	スーローウーリー
	英領事
	字林洋行、江棟、浦祝山
	書林
	ミュールヘッド
	セーバー
27日	蘭領事
28日	新聞屋
29日	フィッチライ
	ミュールヘッド
	コープ
	英人たち
	新聞屋
30日	呉煦
	江棟
	コノープ
	パーカー
	ミュールヘッド
計	延　98人以上

表4.　高杉晋作が対話、対面した相手一覧表

月　日	対話、対面した相手
5月 10日	来訪した蘭人
12日	蘭領事館、仏商店（大小機械）
13日	英米魯の領事館
15日	来館した清人3～4人（筆談）
16日	書店（馬路）
17日	（川で蒸汽船を見る）
18日	張棣香（古道具屋）
19日	書店（馬路）、名倉を訪ねてきた陳汝銓
20日	チャルス（米…中牟田と）
	西門兵営で筆談（陳汶衛）
21日	古道具屋主人
22日	ミュールヘッド
23日	ミュールヘッド
25日	ミュールヘッド（不在）
26日	来訪した馬銓
	蘭商船へ
27日	ミュールヘッド（中牟田と）
28日	来訪した本屋
29日	来訪した本屋
6月 2日	馬銓
4日	来訪した本屋
7日	呉煦
8日	蘭領事館
13日	米人宅
14日	（清国練兵を見る）
16日	米店（銃）
計	延　28人以上

表 3 で示した中牟田の場合は、表 1 の名倉とは一変して、その多くが欧米人であり、やはりその幅は広い。清国人では、6 月 10 日にあった江雪圃、浦祝山、方錫園の 3 人にあっているが、彼らは太平天国軍が南京から拡大することによる被害を恐れて上海へ避難してきた文人である。このような避難してきた文人や学生と千歳丸一行との交流は、前号の日比野のところでも感動的なシーンも含め見られたことを紹介した。彼らとは 6 月 26 日にも会っており、その日は North China Herald の週刊紙を刊行する字林洋行も訪ねている。全体としてみれば前述したように宣教師であるミュールヘッドとの交流に収斂していく状況がわかる。宣教師はやはり上海の欧米人の中でも文化人であり、中牟田の知的好奇心を刺激し、書籍についての情報を広く入手出来る相手であった。そのほかの貿易商社や船会社、船員などは中牟田が希望した海図や地図を求めようとした相手がほとんどであった。中牟田の地図の収集品を見ると、イスタンブールの地図も手に入れており、さすが相手は世界を対象としているそのスケールの大きさを感じさせる。

中牟田のあった人の延べ人数は 98 人以上で、名倉を少し上回る。名倉がじっくり派であるのとは対照的に、書籍と地図を走り回って手に入れようとした中牟田の姿が浮かび上がってくる。

表 4 は高杉が会った人々の一覧表である。会った人の数は前 2 者に比べかなり少ないうえに、名倉、中牟田のような方針が見えない。これは中牟田などに同伴して会っただけの人たちであり、結果であった。基本的にはせっかく上海へ行きながら主体性を欠いた滞在であったといえそうである。

6. 3人の行動空間

（1）毎日の行動空間

では彼ら 3 人は毎日どのように上海を徘徊したのであろうか。ここではかれらの上海の徘徊をした日の記録からその行動軌跡を描き、各人別に表した。この行動軌跡はその空間性を表しており、その空間性からも 3 人の特性をつかむことができる。

まず、図 4 は名倉の行動軌跡である。ここでは名倉の外出した日を 36 日とし、その毎日の軌跡を描いた。ただし記録があいまいで軌跡が明確に描けない場合は、筆者が前号で作成した上海図の街路図上を最短距離で歩行したとみなし、その図上にトレースした。なお図は上が北、右側（東側）は黄浦江、中央やや下の楕円は上海の県城の範囲を表し、楕円状の切れ目は城門を表している。

名倉の行動は前半こそあまり広がらず、様子見の状態がうかがわれるが、それが 5 月末の 5 月 28 日あたりから急に城内外へ拡大し、全上海を租界も含めてカバーするようになっていく。6 月中旬からは午前と午後に分けて、方向を変えて行動空間を一気に拡大していくのがわかる。上海の全体がほぼわかるようになってきたからであろう。前述したように、西門にイギリスの基地がありその西郊には李撫軍の訓練キャンプ場があることがわかり、宿舎から城内をはさんだ反対側まで城内を貫き、あるいは城外を回って長距離を歩いたことがわかる。それに東郊王家の訪問も加わり行動の基本軸が出来上がってくることもわかる。なお、このような行動空間の拡大が名倉の上海を全体としてとらえることにもなったといえる。

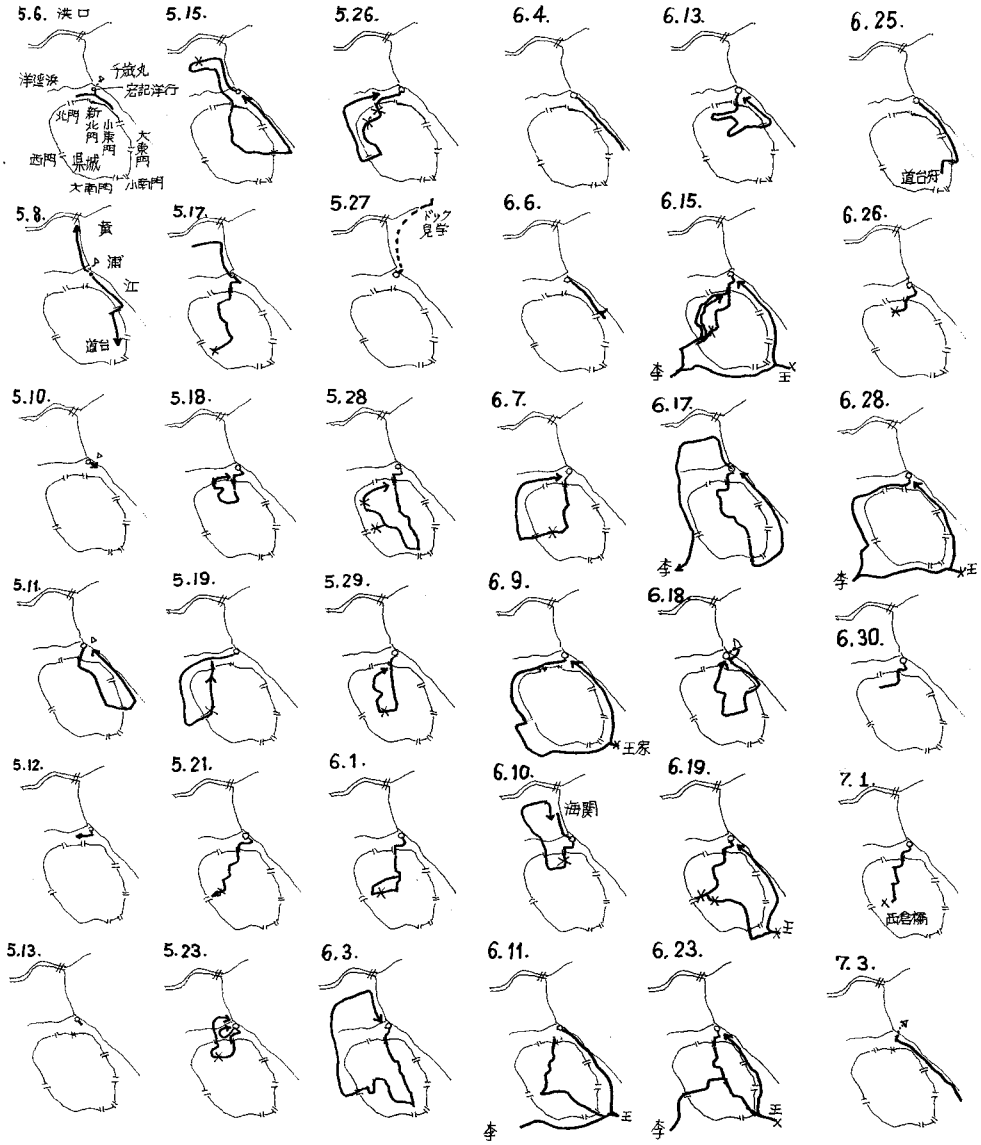

図 4　名倉予何人の日別行動軌跡図

図 5 は名倉が日記記録のなかに書き込んだ上海の概念図である。当時、いや今日でも当時のきちんとした上海地図がない時代に、全域を描き出すのはそう簡単ではなかったはずである。この図は黄浦江をはさみ、県城とは反対側の浦東側から描いている。したがっておおざっぱに言えば右側が北の方向である。右側の支流は蘇州川。格子状の部分が市街地でイギリスとアメリカおよびフランスの租界部分は格子状になっており、比較的整備された感じの認識があったのだろう。この格子状街路が正式に確立していくのはこの直後からで避難民の急増対策でもあったと思われる。それに対して城内は小規模な格子状は見られるがそれらは相互につながっておらず、不規則な印象が表されている。租界の西側領域は県城の西の端までであり、その西側には「村落」というメモが書かれ、もう町ではないことを市街

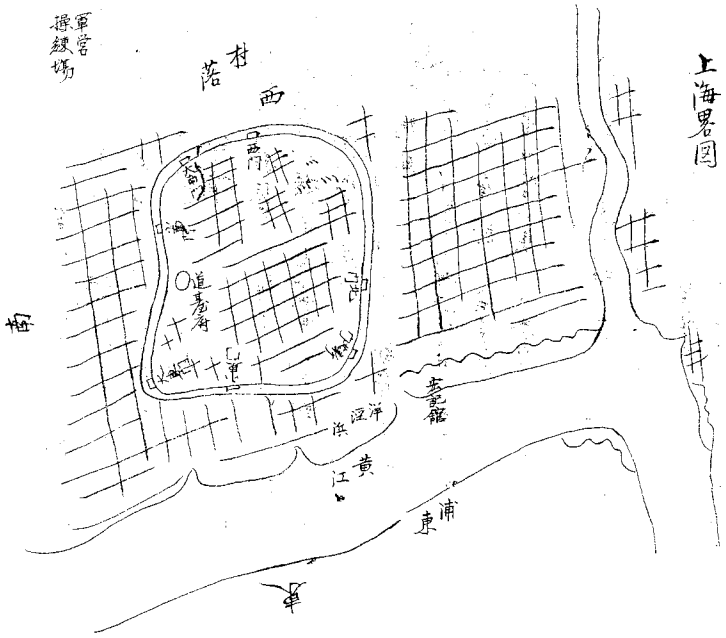

図 5　名倉予何人が描いた上海の概念図

地図が示している。イギリス租界の西に最初にできた競馬場は描かれていない。競馬場も農村的風景であったのだろう。県城の南側にも格子状の市街地が広がるが、これは避難民が押し寄せ始めたことを示しているように見える。いずれにしても、上海の概念図としてはよくできており、これも全域を徘徊した名倉だからこそ描けたものといえよう。

一方、図 6 は中牟田の行動軌跡を描いたものである。一目で名倉の軌跡とは大きく異なり、6 月 14 日のような特定の日を除き、各行動軌跡の範囲が狭く小さく示されている。これは英語ができる中牟田は英語が通じ、それによって得られる国際情報を追って、もっぱらイギリスやフランス、アメリカの租界を狙って徘徊したためである。その狭い範囲の中で多くの欧米人にあっていたということになる。したがって、名倉には上海を全体としてみるところまではいってなかったと思われる。

図 7 は高杉の行動軌跡である。徘徊した日数は少ないし、徘徊した軌跡も短い。大きく動いたのは 2 日のみで、6 月 7 日と 6 月 14 日だけである。前者は役人に連れられ、後者は中牟田に連れられて徘徊したもので、ほかの日も中牟田などに連れられて徘徊したケースが多く、主体的に徘徊したところは少なく、中牟田の軌跡と重なるところが目立つ。したがって、高杉には上海が空間的には全く理解できていなかったといえる。

そこで以上の毎日の個別の軌跡を 3 人個別にまとめて示したのが、図 8 である。左から名倉、中牟田、高杉の順に示したものである。それによるとすでに述べたことからもわかるように、3 人の軌跡の違いが見える。もっとも全域を繰り返し徘徊したのは名倉であり、軌跡の重なるところが名倉のメインルートであり、それによって彼の行動原理がわかる。ついで中牟田であるが、彼は租界中心に集中し、東側の城外への軌跡も多い。最後は高杉で、全体としてかなり質素な軌跡である。全域の徘徊などは中牟田や役人のおかげである。個別には繰り返さないが、これら 3 者間にはかなりの差のあることがはっきりする。

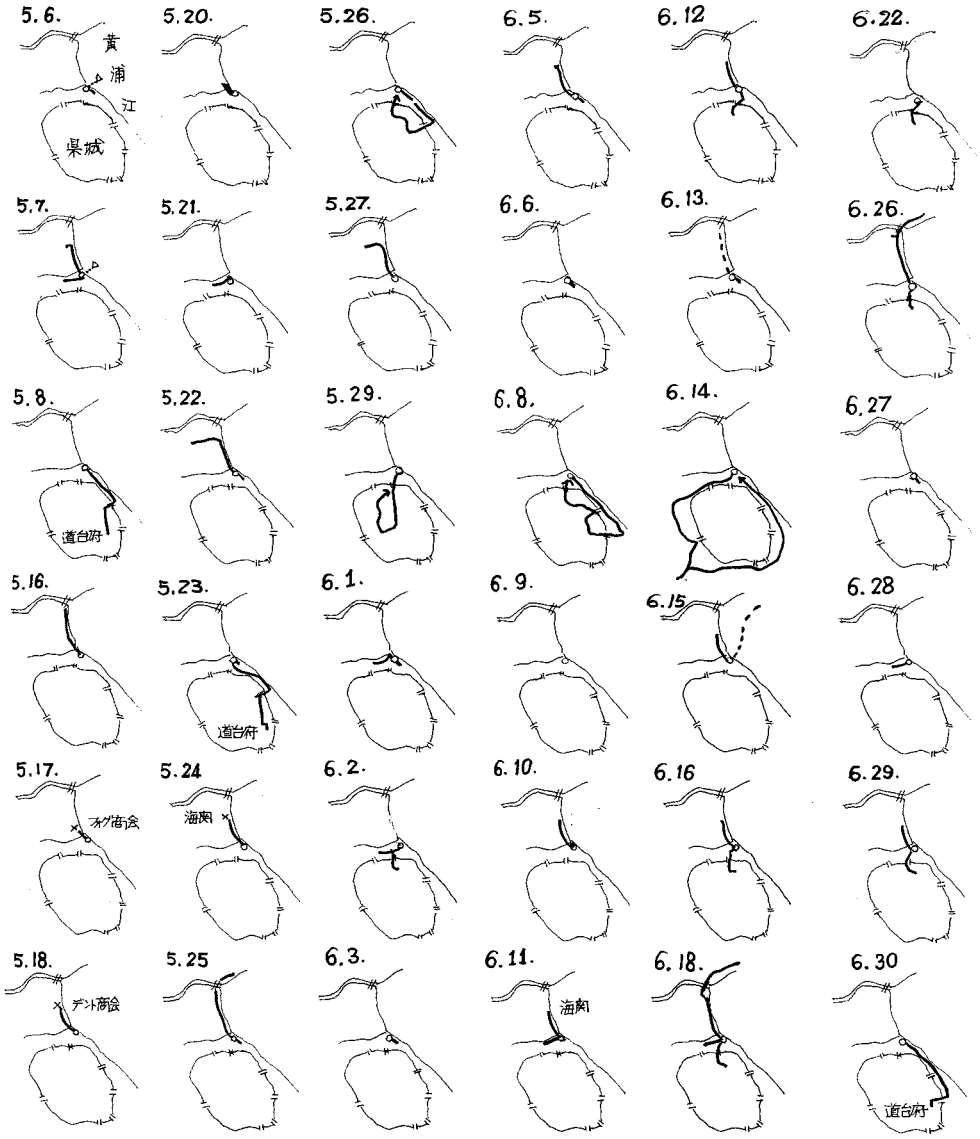

図 6　中牟田倉之助の日別行動軌跡図

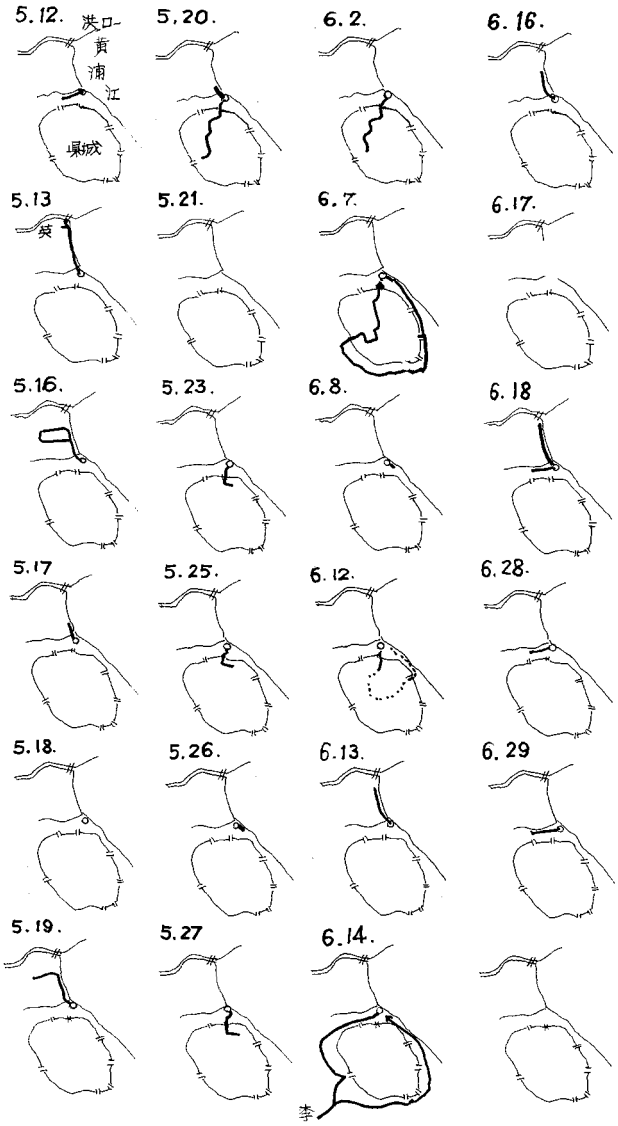

図 7　高杉晋作の日別行動軌跡図

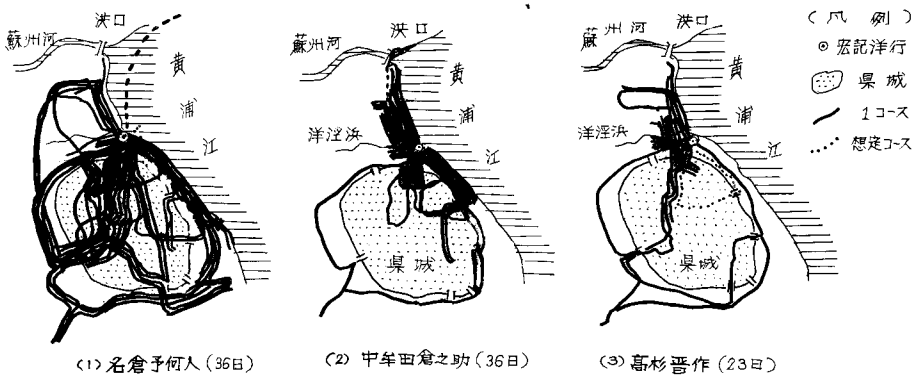

図 8　名倉、中牟田、高杉 3 人の上海での行動軌跡

(2) 行動軌跡と上海観察

最後に各 3 人が徘徊した上海の町についての各人が特徴を示した主な徘徊軌跡を取り上げ、軌跡図を示しつつ、そこで観察した内容についてみてみる。

①名倉予何人の場合

図 9 は名倉の 5 月 15 日の徘徊軌跡を示した。上海上陸後の当初は、宿舎となった宏記館（宏記洋行）からすぐ隣のオランダ領事館やフランス領事館を表敬訪問し、上海道台を一行で訪問した程度で、5 月 14 日には水夫の渡辺与八郎と兵吉が相次いで亡くなり、その理由を黄浦江の「江水ノ濁レルヲ飲ノ致ス所ナラント」と記し、不安になる中、この 15 日は初めて自由に歩けるとし、本格的に町を徘徊した日であった。

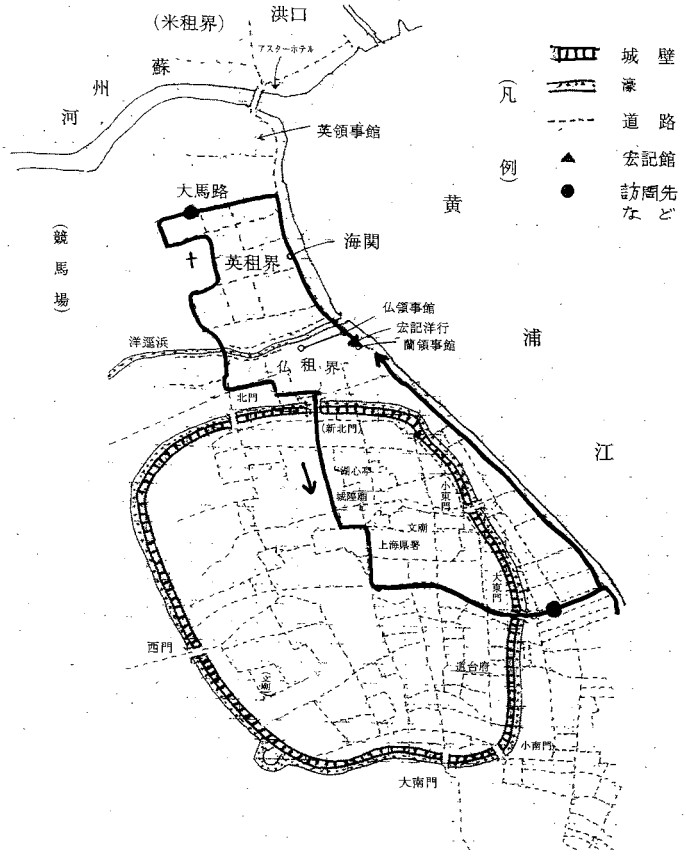

図 9 名倉予何人の最初の上海徘徊コース(5 月 15 日)

まず、北方のイギリス租界の馬路で本屋を訪ねるが、兵書にめぼしいものがなく、途中、イギリス軍の戒厳の敷かれた基地を覗きながら県城の北門から城内へ入り、遊歩している。少し足を止めると名倉を見ようとする群衆の熱気に堪えられないほどで、通りには俗曲や骨董屋、観相家などがにぎやかで、江戸と異ならないとしている。このあと大東門を出て門外で書店を見つけ、書籍を閲覧、そのまま薛家浜沿いでから黄浦江の河岸に出て、河岸では幾百幾千隻というほどの無数の舟に住む人たちを見ている。そして河岸に沿って帰館している。初めての上海の町で多くの群衆に取り囲まれたのが強い印象に残ったようであった。船に住む多数の人々が避難民だとはまだ気づいてはいない。

初めての上海歩きに気をよくしたか、あくる日から毎日積極的に町歩きをするようになり、5 月 17 日には北新門から西門の文廟まで城内を歩き、そこで避難民の呉峩士と知り合い、この文廟がイギリス軍の基地になっていることを知るきっかけになった日である。それからは西門通いが始まり、城内に農地や墓があることに気付いている。また 5 月 28 日には北新門から大南門内の一雲庵を訪ね、住職の歓迎を受け、そのあと西門内の関帝廟を訪ね道士たちと交流し、その楽器演奏やコマ回しの妙技に感心している。官吏の馬銓と知り合うのもこの日である。

だいぶ町歩きに慣れてきた 6 月 3 日には、図 10 に示すように、北新門から城内へ入り、祭礼でにぎわう一雲庵を訪れたあと、文廟へ向かうと、イギリス人数人が名倉を案内してくれ、酒も進められている。名倉の人懐っこさがそうさせるのであろうか。その際、文廟にあった聖像はイギリス兵が駐在するために大南門内の小寺に移転させたこと、文廟は仮の駐留所であり、新たな兵舎を建設予定であることを聞き取っている。いずれも対太平天国への布陣であることを感じている。そのためであろう。その後日、名倉は太平天国軍である長毛賊を知るために『粤匪記略』でその起こった理由などを知ろうとしている。

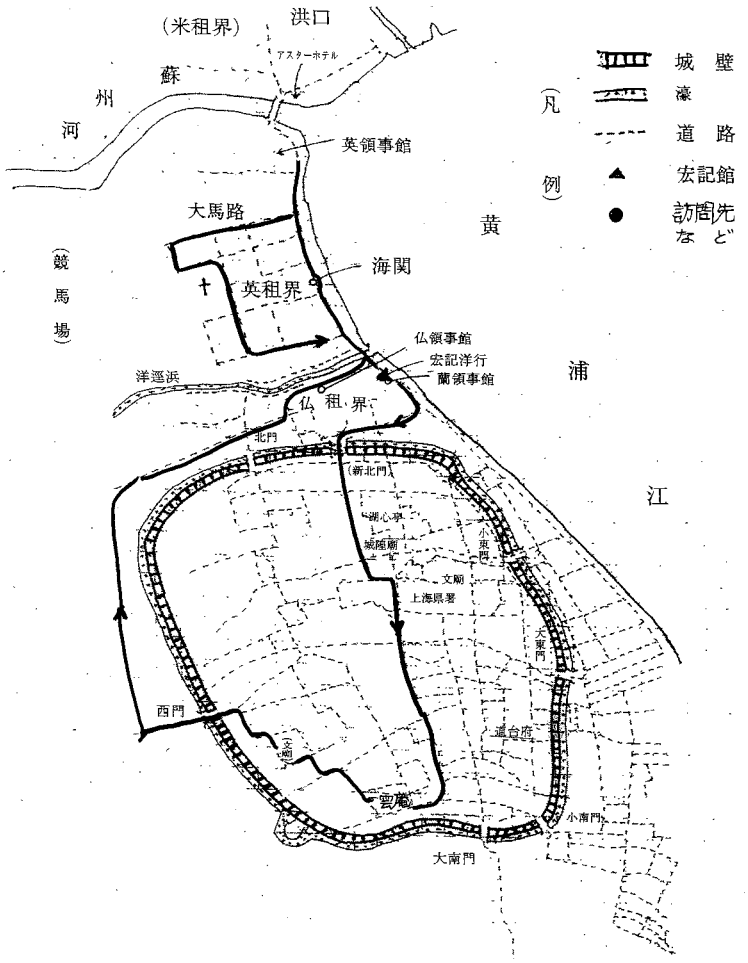

図 10 名倉予何人の 6 月 3 日の徘徊コース

6 月 9 日には北門から城内へ入り、西門から出て、城壁の外側の南側をまわり、さらに東側の城壁の外側を北上して帰館している（図 11）。これはそれまでの城内中心の徘徊ではなく、城外への徘徊に初めてチャレンジしたものといえる。西門外では田畑の形や農家の様子を見、水牛とロバの多いことを除けば、日本の自分の故郷と変わらないとしている。南側一帯では避難民が仮の家を造り、居住しているものが多いとしている。そのさい門のみ残った家も見られ、少し前にここも戦場になったことを知る。そしてそのあと、大南門を過ぎ、裡

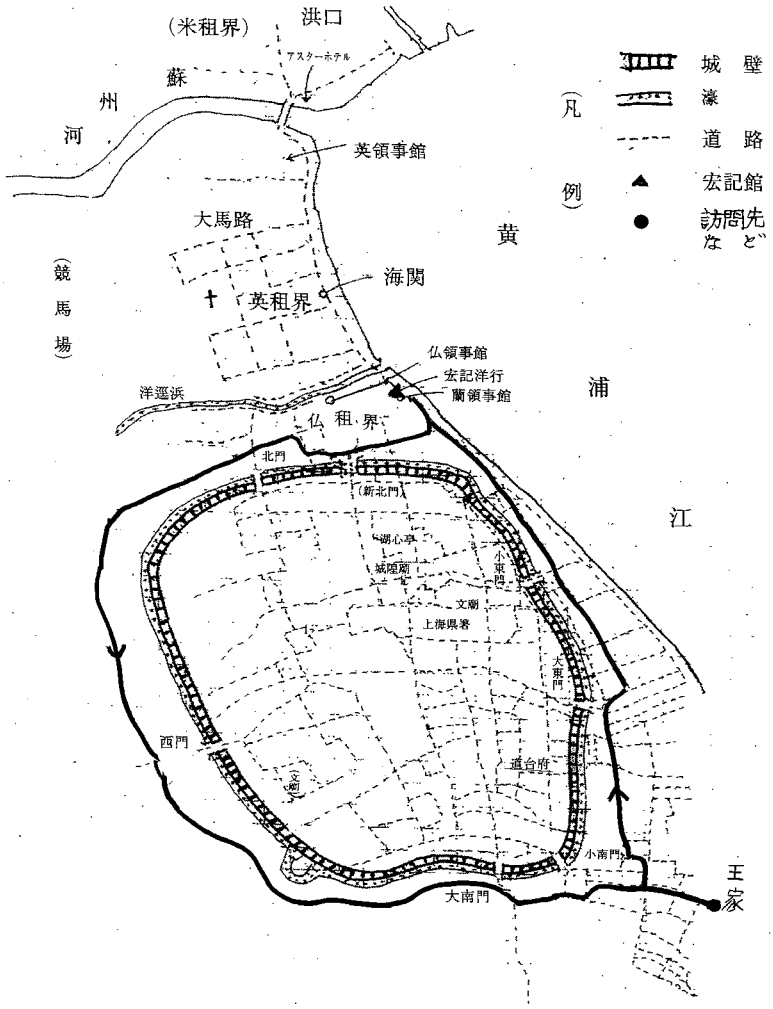

図 11 名倉予何人の 6 月 9 日の徘徊コース

倉橋を通過した時、最大の親友となる王家一族と面識ができ主人の王亘甫はじめ、叔父、岳父などと会い、最初の交流があった。そしてこの王家一族とのかかわりで、西門外の李撫軍の操練を見学することが約束され、名倉にとって思わぬ対面になったのである。城外の徘徊は名倉にとって新たな出会いをもたらしたといえる。

その 2 日後の 6 月 11 日、名倉は早速動き出した (図 12)。まず、西門のイギリス駐留軍、大南門の王家を訪ねるとともに西郊の李撫軍キャンプを訪ねている。しかし、この日のキャンプは休みだったが、営士の侯徳斉が操練場を見学させてくれ、営兵地の大きさ、その単位規模、一部の兵器、兵舎の配置などの情報を得ていて、名倉憧れの清国軍の組織や戦略を知った喜びが大きかったと思われる。

その翌日には、前日案内してくれた侯徳斉が来訪してくれ、筆談で交流したほか、そののちも、長毛賊との戦いで兵士の被害などの情報が流れてくる中で、名倉はすでに勝手知った上海のまちを徘徊している。西門や王家訪問はメインコースとなっている。そして 6 月 18 日に帰国の方針が出されると、さらにその動きは活発になっていく。

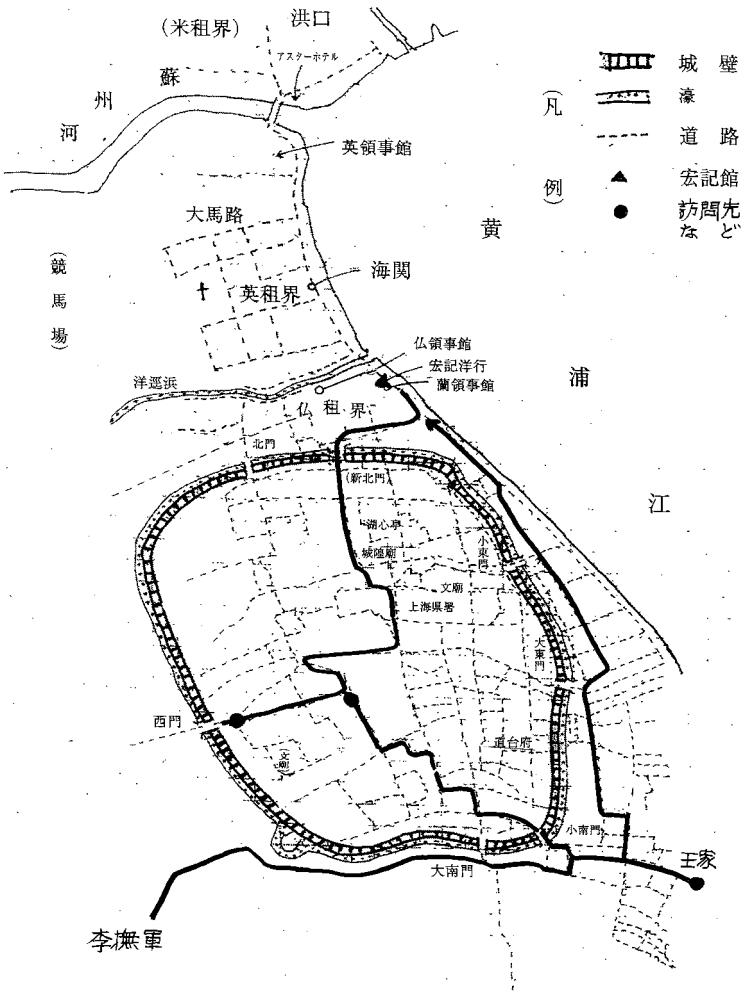

図 12 名倉予何人の 6 月 11 日の徘徊コース

図 13 は 6 月 23 日の徘徊コースである。新北門から城内に入り、知人に会い、南下して小南門まで町を徘徊し、門外の裡倉橋の王家を訪ね、一家のメンバーと会っている。文学や兵学に詳しい兄弟から 6 歳の子供まで顔をそろえて名倉を迎えてくれている。再度小南門から城内へ入り、中心部を徘徊して西門へ。そこで陳汝欽と会い、そのあと李撫軍を訪れ、夕刻の操練が終わるあたりの指揮系統や指揮方法などを見学している。そして再び王家を訪ね、兵術についての日清間の問答を熱心に交わしている。こののち 6 月 28 日には、李撫軍の朝の操練を見たあと王家を訪ね、ここでお別れの一大送別会を受けている。

帰国が少し伸び、6 月 30 日と 7 月 1 日にはそれまでお世話になった人たちを次々訪ね、お別れの挨拶や贈り物の交換にあわただしい時間を過ごしている。そして上海最後の日、それまで落ち着いて見られなかった城門の東側、薛家浜の水路一帯を徘徊し、スイカや瓜などを食し、この城外の人たちは黄浦江の濁水に明礬（みょうばん）を入れて飲み、病気になる人々が多いこと、その一方、氷塊を多く蓄え砂糖で甘くし、水分を取る知恵もあるとしている。

このように、名倉は短い滞在時間を最大限に生かす形で全域を徘徊し、上海の人たちと交

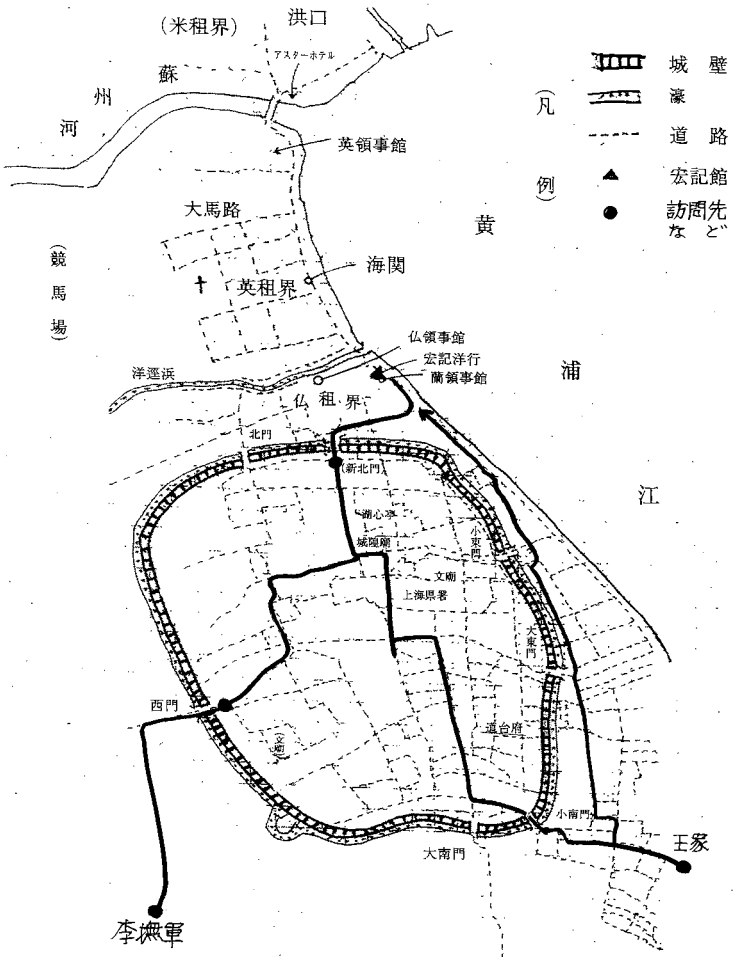

図 13 名倉予何人の 6 月 23 日の徘徊コース

わり、自分の関心ある兵学の中に、イギリス、フランス両軍の援助も受けながら長毛賊と対峙している清国の戦陣や戦法の一端も吸収できたということであろう。上海の町については、港の船の欧米軍艦から商船、さらには庶民の小舟の際立った込み具合への驚き、また町の中のその賑やかさは江戸並みだとし、城内にはまだ農地もあり、城外には避難民は張り付いてきていること、などの記述は見られるが、それ以外あまり町のことには記述が多くなく、冷静である。また、イギリスやフランス、アメリカの租界設定やイギリスやフランスの兵士の城門警備など、上海への列強の進出についても評論は少なく、客観的にとらえ、あまり感情的にはなっていない。

②中牟田倉之助の場合

中牟田は前述したようにその行動空間は狭く、名倉とは比較にならない。これはもっぱら上海にいる欧米国の人々と会って、欧米の航海などの技術そして文化を学びたいとする志から、徘徊先が清国人（原文は「唐人」、以下同じ）中心の城内ではなく、イギリス、フランス、アメリカの租界に目的地が絞られたためである。そのためであろう欧米の文物や書

籍には多大な関心を持っていたことが日記からもわかる。

たとえば、上海到着時の引船の蒸気船の長さ、幅、深さ、蒸気馬力、オランダ領事館前到着時の干満時の深さ、入港時の各国別に掲げる旗の高さ、港に停泊する洋船と清国船の数、などを観察して記録し、North China Herald 紙 6 月 7 日号に掲載された千歳丸到着に合わせて掲載された記事から商船 93 隻、軍艦 12 隻を記録している。英学が得意な中牟田には英字新聞から得られる情報に夢中だったのであろう。また、佐賀の伝習所時代、航海術と算術を学んだ名倉にとっては、それらは基本的な情報だったに違いない。ようやく船から宿へ移ることができた 5 月 9 日には名倉が高杉と木村重次郎と同室になったということ、その夜下痢になったことや他にも下痢病人がでたということなども細かく記録しており、同室になった高杉とは大違いである。そして、5 月 10 日のまだ外出できない時には高杉に 5 科目ある航海学について教えている。

こうして 5 月 15 日に全快してから、中牟田も外出するようになった。そして、5 月 17 日には高杉と五代を連れて、売りに出た蒸気船を見に行っている。そしてその後は欧米人を訪ね、書籍や地図の購入、借用依頼に奔走する。5 月 21 日には前日に焼けて流れ始めたアメリカ蒸気商船の観察をしている。5 月 23 日は一行とともに道台を訪問。道台の一行の道具の数も記録しており、今日でいうフィールドワーカーである。5 月 24 日には江南海関を訪れ、イギリス人 10 人、フランス人 1 人、清国人 20 人で、イギリス人がトップだと記し、先日のアメリカ船の火事でほかの蒸気船 3 隻にも損害を与え、アメリカ人 11 人、清国人 16 人が水死したことも記録している。

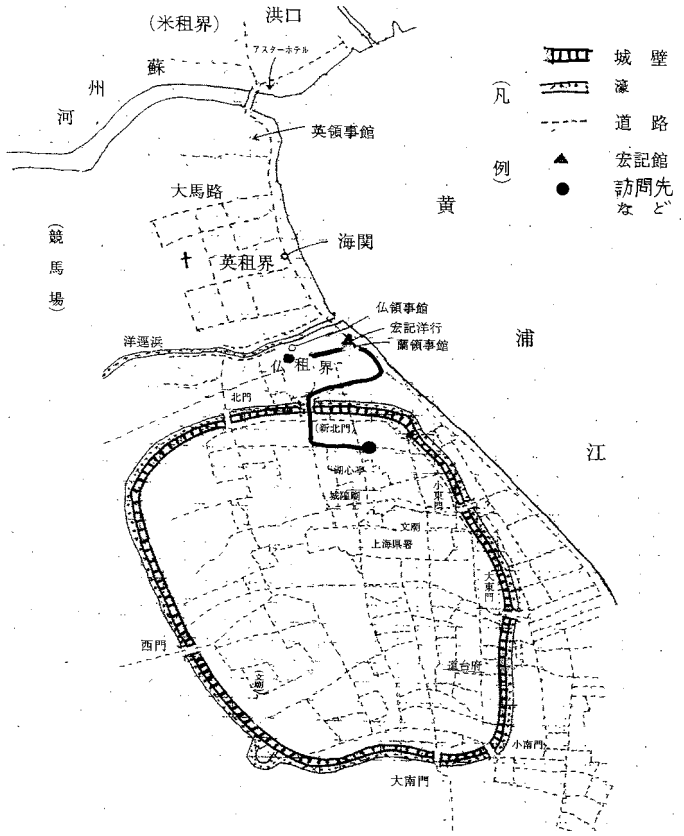

図 14 中牟田倉之助の 6 月 2 日の徘徊コース

6 月 2 日には教会の牧師で病院も経営する宣教師ミュールヘッドのところへ何度目かに出向き、病院へも立ち寄り、長毛賊との戦いで傷を負った欧米人数人、清国人 3 人が入院し、医師は 1 人、入院費は 1～3 テールだと調べ、イギリス租界にも病院があることも記している（図 14）。また、6 月 6 日にはドックを見学、ドックの長さ、幅、深さも期したほか、14 日間の賃料はトン当たり 2 ドル、つぎの 14 日間は 1 ドル 33 セントと記録も細かい。

図 15 は、6 月 8 日の珍しく遠出の徘徊をした時の軌跡である。お供をしたからである。夜の 7 ツ半（午前 3 時）に河岸を南下、買い物もしたが、死体のお棺もあり臭いがひどい。近

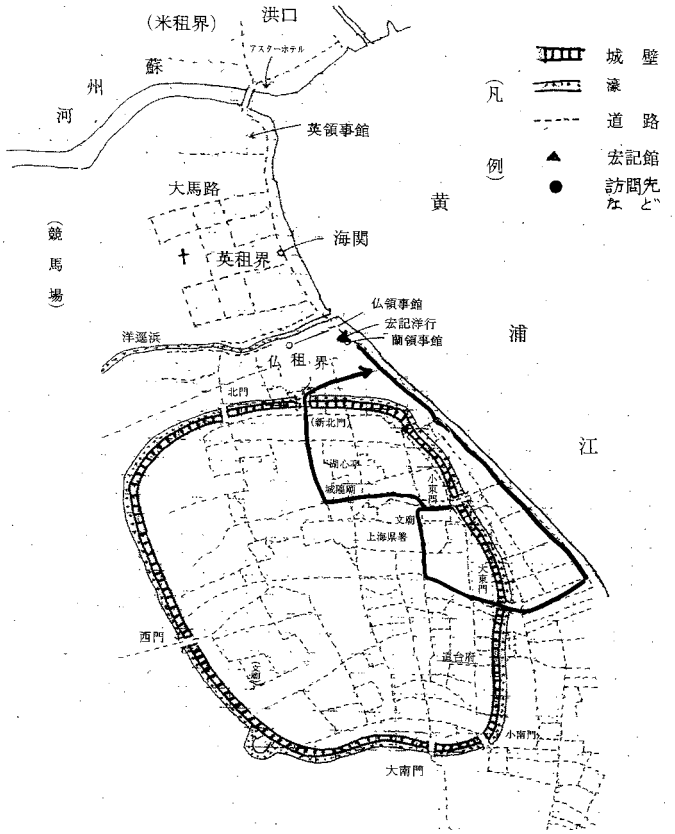

図 15 中牟田倉之助の 6 月 8 日の徘徊コース

くに船修理や食べ物屋もある。絨毯屋ものぞき大東門から城内へ。いくつか店に寄ったあと小東門から出ようとしたが、すでに門は締まり、あわてて新北門へ。するとフランス兵が通行不可だと立ちはだかる。日本人の通行は聞いてないなどの理由だ。そこで談判しヘッドが登場。フランス領事館の客と対等だという説明でやっと許可された。ただし欧米人の通過は許可され、清国人は不可だ。中牟田はこの時初めて自国の門を自国民が通れないことから、長毛賊の戦闘があるとはいえ、西洋人の勢いが強くなると清国人が哀れだと清国の衰微がわかるとしている。やがて北京も同じになるのでは、と不満と心配をしている。

また、6 月 14 日も遠出の徘徊であった（図 16）。これも高杉と一緒である。名倉が見学したという李撫軍のキャンプを見たかったのであろう。出不精の高杉を同室者ということで、中牟田が誘ったものと思われる。早朝には城門が閉じているので、城外を西門の先へ急いだことがうかがわれる。途中、イギリス人が警護するのに出会っているが西門近くのことであろう。キャンプでは野に張られ、その四方に堀、内に土手、その中の木綿で覆った中で居住、1 陣に 200 人、と名倉より詳細。やはり、名倉はフィールドワーカーである。各陣とも朝晩とも調錬、武器をセットにして鉄砲、鎗、青竜刀、鎗、火縄銃、などその使い方と陣形、兵卒の着衣の色、前後に隊名、人名など、観察が細かい。そのあと、南大門で兵卒に出会っているが、出身地は湖南、湖北、江西、安徽、皖南、皖北などでこれも中牟田の聞き取りであろう。陸兵が万余、水兵 5 千人、馬隊兵千余、西洋法も訓練し、清国と西洋の鎗を共用。イギリスとフランス両軍の援助により、敵は大いに恐れている、という情報も得ている。

あと、6 月 15 日の 1 人での造船所訪問時にも船の馬力と規模、製造価格、職種別労働力と給与、製造日数など、記録は細かい。また、6 月 18 日のアメリカのアームストロング砲の見学も砲筒の規模はもちろん、的中距離ほかを記録し、ついでに、上海にいるイギリス兵の士官は 150 人、兵卒は 3 千人まで聞き取り、これにより敵は上海にせめてこなくなったということまで聞き取っている。

そして 6 月 20 日過ぎからは、帰国前の補足やお世話になった多くの人達へのお別れで忙しく過ごしつつ、借用した本の書写にも時間をさいている。

このように、中牟田の行動空間は名倉には遠く及ばないが、個々の訪問時には詳細な記録を残し、まさに今日のフィールドワーカーとして活躍した。また自分たちが門から締め出されようとしたとき、初めて清国人と欧米人の関係を肌で知ったということが読み取れる。

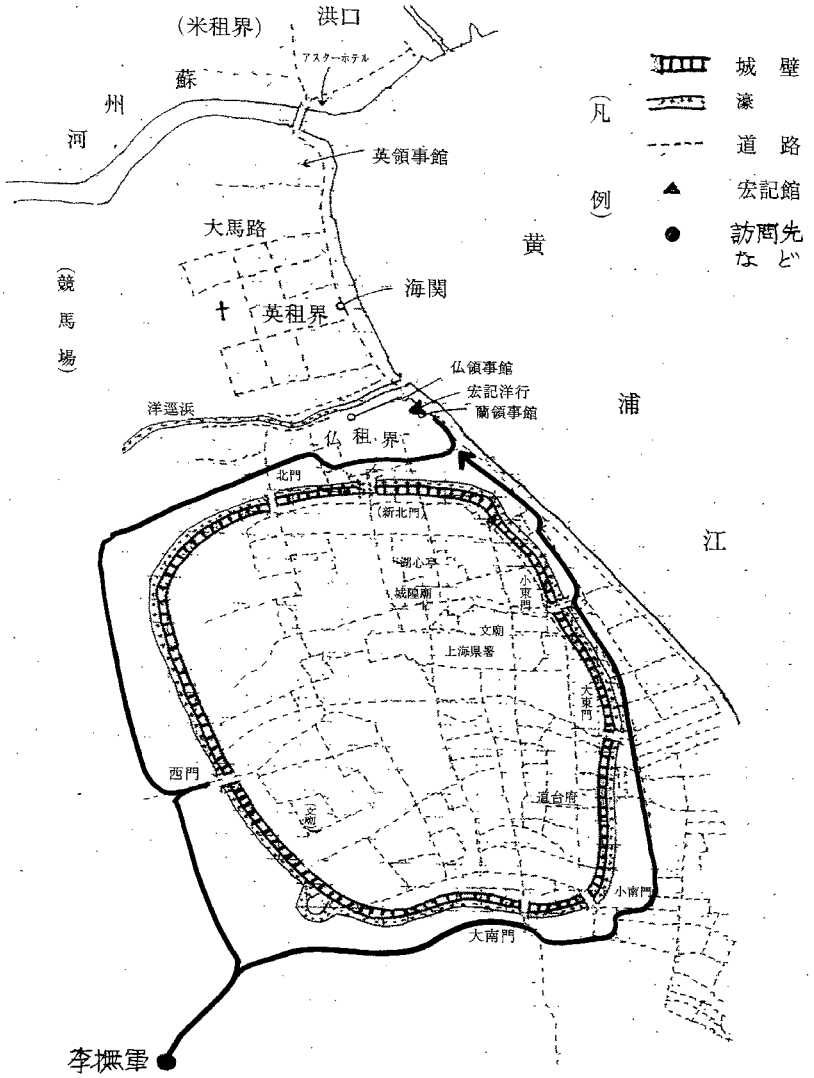

図 16 中牟田倉之助と高杉晋作の 6 月 14 日の徘徊コース

③高杉晋作の場合

高杉は上陸直後から、道台訪問にも参加せず、出不精が続き、名倉や中牟田とは最初から行動がずれていたといえる。

そのくせ 5 月 7 日には長毛賊の銃声が聞こえると、実践がみられるとひそかに喜ぶと記しているが、のちの記録を読むととてもそんな度胸はなさそうである。5 月 10 日にはオランダ人から聞いて、長毛賊が上海から 3 里のところまで迫っていると記しているが、それに対する感想は見られない。5 月 13 日に初めて外出らしい外出をして、中牟田とイギリス、

アメリカ領事館へ出かけ、大砲や小銃が並んでいるのを見、イギリス人が清国人のために長毛賊から守っているのだと記している。翌日には乗組員の死去の報を受けて、わが身は自分で守らねば、と自戒している。5 月 16 日には千歳丸へ出かけ、五代と話し、5 月 20 日は西門へ出かけ、侯と陳にあっているが、これも、以前、名倉をたずねてきたこの兄弟へ名倉が借りた本の返却を高杉に頼んだためである。その際、兄弟と筆談できたせいか、翌日には、「上海の地は支那に属すといえども英仏の地だといえる」と突然、上海のことに触れている。5 月 23、25、27 日と五代あるいは中牟田とミュールヘッドを訪ね、数学関係の書や新聞を得て帰館するが、中牟田だけがそのお礼に扇子や錦絵を贈ったほか、中牟田自身は、午後、さらに出かけ、5〜6 人の欧米人に会っている。6 月 2 日には馬銓のところへ出かけているが、これも幕府の役人に同行しただけ。城内の市街地は狭く、風雨で困ったとだけ記述。

6 月 7 日にやっと初めての一周コースを徘徊するが（図 17）、これも幕府の役人に同行しただけ。初めての上海の徘徊である。南大門外では野菜や粟米（トウモロコシ）を見て日本と変わらないと記したあと、初めてまわりに山が見えないことに気付き、西方に清国側の陣営を見ている。再び城内に入ると空き地は草木で埋まっており、孔子廟は嘆かわしくもイギリスの陣営になっており、そこでイギリス士官から紅茶をごちそうになったとしている。高杉にとっての初体験で少し筆が進んだということであろうが、イギリスの廟の占拠について嘆かわしいことだと記しているだけである。翌日千歳丸で五代から京坂間の事変を知らされ、すぐ現場へ飛んで行きたいがままならぬとし、上陸した後、ピストルと地図を求めている。その後も内容のある記録はないが、6 月 13 日に中牟田と夜の散歩に出かけ、そこで出会った横浜から来たアメリカ人宅へ誘われ、大阪開港の遅れ状況を教えられ、水戸藩が最強かとたずねられ、水戸藩有志の死者に思いを寄せている。こう見てくると、高杉の頭の中は日本にあり、上海にはなかったことがわかる。しかし、この夜の件は中牟田の記録にはない。中牟田はその直前にオランダ領事館で、長崎へ行く前のトンプリングに会い、交渉しており、中牟田にとって、散歩であったアメリカ人とは会話にはあまり関心を払って

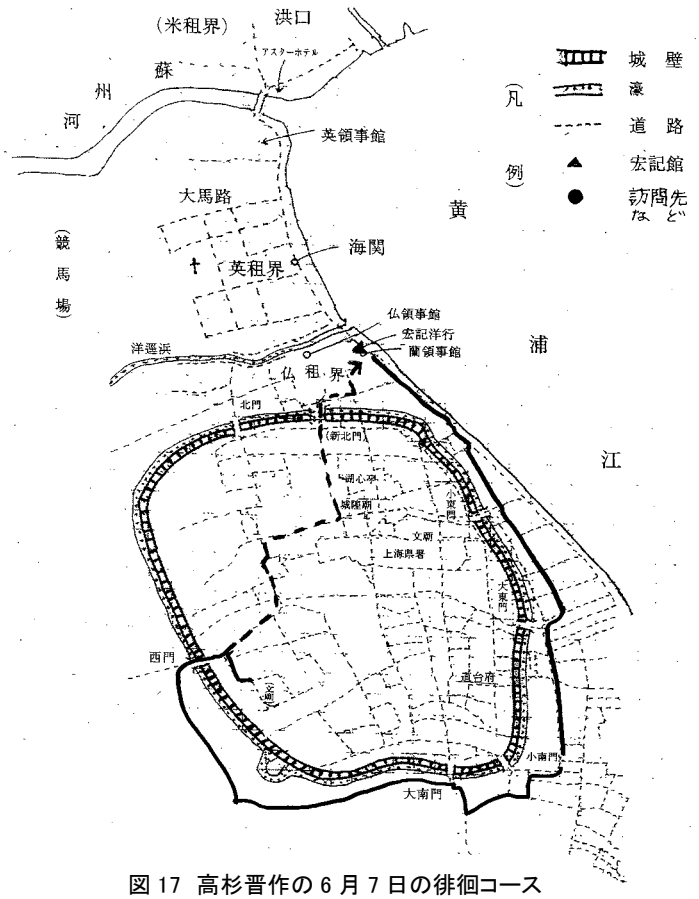

図 17 高杉晋作の 6 月 7 日の徘徊コース

いないことがわかる。めったにこういう機会のない高杉であったからこそ記録に残したのだろう。

高杉にとってもう一度上海を周遊するのは6月14日で、これも中牟田の兵学の関心事にお付き合いしたためであり、すでに中牟田の項で述べたので、ここでは省く。そして最後の記録は6月18日にやはり中牟田に揺れられて出かけたイギリス砲台でのアームストロング砲の見学である（図18）。これも中牟田がすべてお膳立てをしたのであり、この砲は作った人の名がつけられていること、玉入れが便利なこと、上海には6砲あること、だけの記述で、中牟田の詳細な記録とは比べ物にならない。

このように、高杉は上海での行動と観察を見る限り、最初に体調を崩したと称したこともあってか、飲み水に注意を払い、出不精であり、出歩くときもほとんどは中牟田にくっつき、時に五代にくっつき、それも短距離で、帰国後の攻撃と護身のためと思われるピストルと時計を求めるのが最も熱心であったといえる。驚くことだがほかの従者のように、自ら主体的に目的を持って行動することはなく、したがって上海そのものへの関心もなく、攘夷の対象である欧米人への関心もなく、上海が列強の支配を受けている現実にもとくに大きな関心を払ってはいない。上海に関する知識はほとんど中牟田からの情報である。わずかに五代から聞く日本情報に反応をしているだけで、こんな高杉を連れだしていた中牟田にはご苦労なことであった。中牟田がいなければ高杉は何もできなかったであろうと思われる。

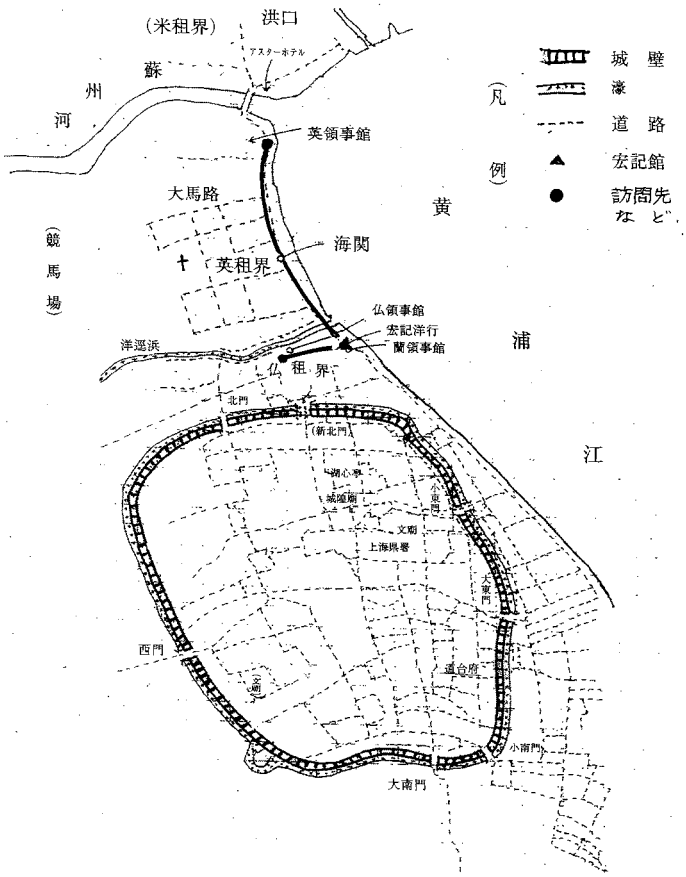

図18 高杉晋作の6月18日の徘徊コース

7. 終わりに

以上名倉、中牟田、高杉の 3 人を取り上げ、それぞれの上海での日記内容から、その行動とそれに伴う空間認識の特徴について検討した。

結論的には 3 人 3 様であることがはっきりし、同じ上海の地を同じ期間滞在しながらもその行動様式には大きな違いがあり、それに伴う空間的な認識にも差が見られることがはっきりした。

簡潔に言えば、名倉は兵学、それも清国のそれに強い関心を持ち、外出をいとわないで徘徊するうち、李撫軍に訓練場や将軍とも接触でき、そのきっかけを作った地元財閥の王家の一家とも親交を結ぶところまで発展した。それはその後数度にわたる清国訪問でさらに親交を深めることになる。名倉にとって上海訪問は清国の兵術を学ぶ一方、上海人たちとの友好関係を結んだ経験となった。それは名倉に上海の空間認識を可能にしたといえる。このような交流は、名倉の人を引き付ける性格もあったのであろう。鎖国の中で育ったとはいえ、十分、国際人の役割も果たしたのである。

一方、航海術ほかの技術と英学を学んだ中牟田は、清国人よりは欧米人との交流に熱意を注いだ。欧米の先進技術と情報確保に強い関心を持ったためである。そのためその行動空間は租界中心の範囲が主で、名倉にははるかに及ばないが、その積極的な調査は、フィールドワーカーそのものであった。しかし、租界中心の空間認識はかなり進み、自由に徘徊しているが、城内を含めた上海全体像の認知は名倉には及ばなかったと思われる。名倉は同室で出不精の高杉を時に引っ張り出し、徘徊するが、同時に体調を崩して室内から出られなかった、前号で紹介し納富にも上海情報を教えていたと思われ、性格的に面倒見がよかったと思われる。

高杉はまさにこの中牟田の存在によって上海を過ごせたのであり、中牟田なくしては存在できなかったといえよう。それにしても、名倉と中牟田には強い目的とそれに沿った行動力が見られたが、高杉にはそれが見当たらない。少なくとも自主的に行動したことはほとんどなく、もっぱらピストルと時計だけに関心があったのみで、若干数学の本を中牟田に伴われて購入しているが、上海への関心もほとんど見られず、当然上海の空間認識はゼロに近かったと思われる。それは上海へ来る前の来歴に落ち着きがなく、物事を体系的にみることが欠如していたことが予想される。

しかし、この 3 人の帰国後の扱われ方は大きく異なった。高杉は尊皇攘夷思想をバックに暴力で外国勢力に立ち向かい、喝采を浴びるかたちで取り上げられ、結局、早逝する。上海で得たものはなんにも反映していなかったようにみえる。得ようとしたものがなかったからだろう。しかし、藩閥の明治政府からもちあげられて、「東行先生」と称えられるが、この上海記録からはそれが虚像にみえるほどである。

一方、もっとも活躍した名倉は、その後も清国やフランスは派遣された。しかし、帰国後は浜松藩が廃藩となり、修史館掌記、のち台湾学教習など、若干のポストを得るが、上海やフランスを経験したパイオニア的経験は十分に生かされておらず、明治時代が進むほど、その評価は藩閥政治の中で低下し、上海派遣での活躍した体験も、ほとんど実績のなかったと思われる高杉に株を取られ、最後は貧困の中で亡くなっている。

また、中牟田は、好きな航海術が明治政府に評価され、海軍の世界で活躍し、長く海軍兵学頭を務めた後、横須賀造船所長から海軍中将、呉鎮守司令長官へと出世している。佐賀藩

出身だが、藩閥グループの一角の中でその技術力と上海時代に見せた教育力の才能が評価されたように思われる。

最後に、この 3 人の上海派遣はどのような影響を日本に残したのかについて述べる。一般論では、上海が列強に蝕まれるのを見て、他山の石とする認識をしたという評価が強いが、彼らの日記からみれば、それはのちに加えられた観念論で、日記からはその裏付けは難しい。彼らが味わった上海の混乱は、欧米列強による植民地化という感触よりも、太平天国軍の攻撃と破壊による上海の混乱であり、その際、イギリス、フランス軍が清国軍とともに戦い、清国、上海を助けているという実感のほうが、強かったのではないかと思われるからである。これについては高杉もそのように記している。若い士族の彼らには、いきなりの複雑な状況下で国際都市化しつつあった上海に飛び込み、観念的な思考を必要とする国際関係を現実の中から止揚して理解するのは無理だったのではないかと思われる。それよりも名倉や中牟田、そして前号で取りあげた納富や日比野も同じく、彼らが上海で上海人や上海の欧米人と積極的に交流し、国際人としての成長をみたことに高い評価をすべきであろう。彼らは従者としての自由度を生かし、初めての国際都市上海をそれなりに味わったのである。一部の評者の言う彼らの中に、その後の日本帝国主義の予兆を見たという結論(30)は、飛躍した観念論であるといえる。

ただ、派遣団全体としてみると、清国との貿易のための協定問題についての役人と道台側との交渉、具体的な貿易品の検討などの問題もある。これについては前者は中牟田がメモし、春名が紹介した『公儀御役役唐国表にて道台其の外と応接書』の分析(31)が必要だし、すでに研究が進んでいる清国側の資料分析(32)との比較研究が必要になるし、後者については長崎商人で同行した松田屋友吉の『唐国渡海日記』(33)のさらなる検討が必要であり、それらによってこの初の幕府による清国派遣船の総合理解が進むことになろう。

付記

本稿を作成するにあたり、本年度文科省科学研究費、基盤研究（C)、藤田佳久「近代中国地域像の基軸と変動一『支那省別全誌』と『新修支那省別全誌』の比較から一」の一部を使用した。また本学東亜同文書院大学記念センターが助成されている文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業による助成金の一部も使用した。あわせてお礼申し上げる。

注

(1) 藤田佳久（1915）「幕末期に日本人が訪れ記録した上海像一納富久次郎と日比野輝寛の日記の場合一」、『同文書院記念報』、23 巻、2014 年度版、愛知大学東亜同文書院大学記念センター、p.p.91-114.

(2) 小島晋治監修（1997）『幕末明治中国見聞録集成』、第 11 巻、ゆまに書房.

(3) 佐藤三郎（1972）「文久 2 年における幕府貿易船千歳丸の上海派遣に行いて一近代日中交渉史上の一齣として一」、『山形大学紀要』、人文科学、第 7 巻、第 3 号。それはのちに、佐藤三郎（1984）「文久 2 年における幕府貿易船千歳丸の上海派遣について」、同著者『近代日中交渉史の研究』、吉川弘文館刊所収、p.p.67-96.

(4) 春名徹（1962）「1862 年、幕府千歳丸の上海派遣」、田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』、吉川弘文館刊、p.p.556-601.

(5) 松沢弘陽（1988）「幕末西洋行と中国見聞（一)」、『北大法学論集』、38、p.p.171-203.

(6) 宮永孝（1995）『高杉晋作の上海報告』、新人物往来社刊.

(7) 馮天瑜（1999）「「千歳丸」の上海行一日本幕末期の中国観察を評す一」、『中国 21』、Vol.7.p.p.169-198.

(8) 閻立（2008）「清朝同治年間における幕末期日本の位置づけ―幕府の上海派遣を中心にして―」、『大阪経大論集』、第 59 巻、第 1 号、p.p.83-99.
(9) 閻立（2011）「1860 年代における上海道台の日本観」、『経済史研究』、14 号、p.p.152-166.
(10) 黄栄光（2003）「幕末期千歳丸・健順丸の上海派遣等に関する清国外交文書について―台湾中央研究院近代史研究所所蔵「総理各国事務衙門清檔」（1862～68）―」、東京大学史料編纂所研究紀要、第 13 号、p.p.176-200.
(11) 納富介次郎「上海雑記」、外山軍治解説（1962）『文久 2 年上海日記』、東方学術協会刊所収。
(12) 日比野輝寛「贅肬録」、外山軍治解説（1962）『文久 2 年上海日記』、東方学術協会刊所収。
(13) 春名徹（2001）「過渡期の位置知識人における異文化接触の意味―名倉予何人の場合―」、『調布日本文化』、第 11 号、p.p.36-61.
(14) 春名徹（1997）「中牟田倉之助の上海体験―『文久 2 年上海行日記』を中心に―」、国学院大学紀要、第 35 巻、p.p.57-96.
(15) 東行先生五十年祭記念会（1916）『東行先生遺文』、民友社刊のうち「上海掩留日録」、p.p.76-83、あわせて後述記録分～124.
(16) 前掲（6）。ただし、p.115 の上海図のうち、道台府の位置は西側へ寄りすぎている。また関帝廟の位置も西北側によりすぎているように思われる。
(17) 前掲（17）。
(18) 名倉予何人（1862）『海外日録』、前掲（2）所収。
(19) 前掲（3）。
(20) 森田吉彦（2009）「兵学者名倉信教の幕末海外見聞」、『帝京大学日本文化学』、第 40 号、p.p.45-81.
(21) 田﨑哲郎（1986）「名倉予何人『海外日録』」、『愛知大学国際問題研究所紀要』、第 85 号。
(22) 中牟田倉之助（1862）『上海行日記』、春名徹（1997）、前掲（14）。
(23) 中牟田倉之助（1862）「公儀藩役役唐国上海表にて道台其外と応接書」、春名徹（2001）「中牟田倉之助の上海経験再考―「公儀御役役唐国上海表にて道台其外と応接書」、『国学院大学紀要』、第 39 巻、p.p.77-109.
(24) 前掲（15）。
(25) 平岩昭三（1986）「『遊清五録』とその周辺―幕府貿易船千歳丸の上海渡航をめぐって―」、『日本大学芸術学部紀要』、第 16 号。
(26) 前掲（6）。
(27) 前掲（7）。
(28) 前掲（13）。
(29) 前掲（13）、p.43.
(30) 前掲（7）および、横山宏章（2002）「文久 2 年幕府派遣「千歳丸」随員の中国観―長崎発中国行の第 1 号は上海で何をみたか―」、『県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要』、第 3 号、p.p.197-206.
(31) 前掲（24）。
(32) 前掲（10）。
(33) 松田屋半吉（1862）「唐国渡海日記」、『上海研究』（1942）、第 1 輯、p.p.116-162.